
Wahrheit

空之風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W a h r h e i t

【Nコード】

N 7 3 4 4 H

【作者名】

空之風

【あらすじ】

世界の三分の二を征した帝国の崩壊から100年。世界は未だ混乱の中にある。そんな中、傭兵フーガは同じく傭兵のリリィと出会う。この小さな邂逅が、やがて世界に大きな変化をもたらす。そして、100年前の歴史に隠された“真実”とは？濃厚な世界観を描く異世界戦記小説です。

プロローグ（前書き）

W^{ヴァー}a^{ール}h^ルr^{ハイ}h^トe^{イト}i^{イト}t^{イト}.. 真実、事実、真理、正しさ、真実性。

プロローグ

世界には、物語が溢れている。

神話、童話、逸話など。

その中の一つ、「アルキア物語」という物語がある。

どこにでもあるような、仲間と共に魔王を倒すというものだ。

所謂、“童話”の部類に入るのだろうか。

しかし、この物語は“童話”などというロマンティズム溢れる物語ではない。

いや、そもそも“童話”とは、一般に伝えられているような、

そう、夢と希望に溢れた物語では決して無い。

ならば、これは“そういう意味”での“童話”と言えるだろう。

それは、この物語に出てくる、ある一人の登場人物の責任である……。

彼は主人公の仲間であつた。仲間と共に笑い、泣き、同じ道を歩んでいった。

だが、彼は裏切つた。それも魔王を打ち倒した直後に、主人公達に牙を向けた。

仲間、いや彼の元仲間達は各々に彼に問う。

迷いと、不安と、絶望の最中に、声を振り絞って、

「なぜ……?」と。

彼はこう答えた。

「気にしないでいい。俺は自らに従つたまでだ」

そして、彼は死んだ。元仲間の手によって……。

何故彼は裏切ったのか？

彼は何を感じたのだろうか？

その答えを出すのは今ではない。

だが、これだけは言っておきたい。

この物語を始める前に……。

人はよく真実を求める。

だが人は真実を知る度に世界の見方を変えてしまう。

真実は時として残酷なこともある。

そしてそれがどうすることの出来ない現実ならば、

人は後悔する。

知らなければ良かったと……。

覚えておいてほしい

真実は

諸刃の剣なのだ……

第一章 第1話 始まり

両脇を森に囲まれた、人通りの少ない小さな街道を、一人の青年が歩いていた。

歳は二十歳ぐらい、中肉中背で、端整な顔立ち。

髪は黒く、前髪はギリギリで目にかからない程、後ろは首筋まで真っ直ぐ伸びている。

紺色の長袖と薄い灰色の長ズボン、茶色く動きやすい皮の軽式鎧（肩、胸、腰、腕のみに装着するもの）、腰には鉄製の黒い鞘を差している。

今、青年の目付きは鋭く前方を見ている。

次の町まであと数時間という所で、青年は如何にも盗賊です、と言わんばかりの男たちに囲まれていた。

気配で相手の人数を確認する。

（数は七、いや八人か。前に四人、後ろに四人）

人数を確認すると、前を囲んでいる連中の中央にいるリーダー核らしき人物、筋肉質でスキンヘッド、右腕に巨人が竜を踏みつけている刺青、白いだぶだぶのズボンを穿き、何故か上半身は裸の男に向かって口を開いた。

「俺に何か用でもあるのか？」

棘のある言葉でスキンヘッドに尋ねる。

尤も、用件なんぞこいつ等が出てきた時点で当に分かっているのだが。

（まあ、この後のセリフは予想付くけどな……）

青年の溜息を余所に、スキンヘッドの男は声を張り上げて青年に言った。

「おうよ！ あんたには興味ないがその懐に用があつてな。大人し

く有り金全て置いていったほうが身の為だぜ。

何故なら俺達はロート王国を救った事で有名な、あの傭兵部隊スペリオルの中でも随一の強さを誇るレイⅡエンド――

を、見た事があるこの俺、ミートル様が率いる傭兵部隊ジャイアント・デスなのだからな！」

ごつい体格をしたリーダーらしき男、ミートルは自信満々に答えた。

（見た事あるだけって自慢になるのか？）

青年はそう思ったが、ミートルは続ける。

「いずれはフェイスやカタストロフィのようなビックな傭兵部隊になる予定だ。覚えておけ！」

何なら幹部のメンバーを紹介してやろうか？」

「遠慮しておく」

「よし、ではお前ら、登場パターンZだ。気合入れていくぞ！」

「――「おう！！」」

青年の否定の言葉を無視して、幹部と呼ばれた前にいる手下A、B、Cは待っていました、と言わんばかりに気合を入れて答える。

（もうどうでも良くなってきたな……）

青年はさっさと先に進みたかったが、彼らが道を塞いでいる。

青年は剣術にはかなりの心得があり、そして幾度も修羅場を潜り抜けている。

だが、『例えどのような相手でも、相手の実力も見切れていないまま、敵の懷に飛び込むのは下策』というのが彼に剣術を教えた師匠の教えだ。

まあ、こんな盗賊の実力なんてたかが知れているのだが、それでも用心に越したことは無い。

それに、師匠の教えは青年にとって絶対だ。

青年は先ず盗賊達の得物を確認する。

（剣、槍、弓をそれぞれ持っているのが前にいる三人。あの槍、や

たらと長いな)

確かに、盗賊の一人が持っている槍は長かった。おそらく3メートル位はあるのだろう。

(ミートルと幹部って奴ら以外は棍棒みたいな物か。ならミートルって奴の武器は？ 見た限り、銃を所持しているようにも見えないが)

今の時勢、西大陸では軍用銃はともかく、リボルバー式の拳銃ならば容易く購入できる。

それが近年、西大陸の治安悪化の原因の一因となっている。

青年が相手を見切っている中、何故か彼らの自己紹介が始まった。

「我こそは剛剣のコイル、我が剣は岩をも切り裂く！」

「我は突風のジョン、我が槍は風をも貫く！」

「我こそ空裂のドルゴ、我が弓矢は空をも裂く！」

三人は三角形を作り、真ん中に武器を掲げて、それぞれの武器と中央で交差させる。

「そして我こそがリーダー、豪力のミートル也。我が力は全てを捻じ伏せる！！」

その三角形の間から、武器の下を潜ってミートルは拳を挙げて、同じく交差させた。

大げさなポーズを取りながら四人で声を合わせて、

「「「いづれそうなる！！」」」

「予定か！！」

思わずツツコミを入れてしまう青年。こいつら、実は案外人が良いのかもしれない。

四人がポーズを外し、そそくさとそれぞれの元いた場所へ戻っていく最中、青年は相手の実力を“見切っていた”。

(ミートルの武器は素手、これならそれほど危険はない)

青年は腰に納めてある刀に手をかけ、腰を低くして抜刀の構えを見

せた。

「な！？ こいつ、この人数相手にやる気か！」

ミートルが驚きの声を上げる。他の連中もミートルと同じような表情をしている。

おそらく彼等は、脅せば逃げるか金を渡すかのどっちかだろうと思いい、まさか青年が戦う事を選択するとは全く予想していなかったのだろう。

最初は驚きの表情を見せたミートルだったが、直ぐに不敵な笑みを浮かべた。

「お前、随分と俺様達を甘く見ているのか、それとも余程自分の腕に自信が有るのか、どちらにしろ命知らずな奴だな。

野郎共、こいつを叩きのめすぞ！」

ミートルの号令で、盗賊達もとい“自称”傭兵部隊ジャイアント・デスは各々に戦闘体勢をとる。

尤も、青年は全員を相手にする気なんて全く無い。倒すのは前を塞いでいる四人だけ、幹部三人とミートルのみ。

勿論、青年にとって全員を倒す事など造作もない。だが……

（それは流石にめんどくさい。こいつ等を叩きのめしたところで、俺には一文の得にもならないし……。

俺にとっての最良手は、前にいる奴だけ倒して、後はさっさと逃げる！）

青年は“さっさ”と終わらせる為、一番手前にいるミートルに向かって走り出す。

……が、直ぐに止まることになる。

「そこまでよ、あなた達！」

突然、横から大声が聞こえてきた。……横？

（横は森のはず？ 何処から出てきたんだ？）

青年と盗賊達はほぼ同時に横に振り返った。そこにはいつの間にか、女性が生立っていた。

年齢は若い、二十歳もっていない。おそらく十八歳ぐらいだろう。

小柄な体型で白い無生地 of 長袖の上に赤いジャケットを着ている。
下は山吹色の長ズボンである。

明るく茶色い髪は、後ろの首の上あたりでカールしていて、真っ直ぐにすれば肩まで伸びていると思われる。

その顔つきははっきり言って美人の部類に入る。のだが、今はその明るく茶色い髪はボサボサで、全身にクモの巣やら木の枝やらが付いている。

その場にいる全員が呆然となっている。彼女はミートルを指差し、「この私、リアリスⅡホープの目の前で盗賊紛いな事をやるなんていい度胸ね、覚悟しなさい！」

そのあなた、もう大丈夫よ。今のうちに逃げなさい。私の事なら心配しなくていいわ、ちゃんと後で謝礼貰いに行くから。だから名前と住所だけ教えて」

「……は？ 俺!？」

いきなり自分に話しかけられ、青年は対応にどうしていいかわからず返答に窮した。

「おい、女! 行き成り出て来て何なんだお前は? つーか、何処から出てきやがった!？」

ミートルはこの場にいる全員が思っている疑問を聞いた。彼女は自分の服を指すと、

「この格好見てわからない？」

街道歩いてて森の中を突っ切って近道しようと思って森に入ったら、そのまま道に迷って三時間位歩き回って、

ようやくこの街道に出てきたらこの状況に出くわしたの!」
と、何と無く訳がわからないような、わかるような説明をした。

「ま、まあ何と無く状況はわかったけどよ、それで、アンタは一体何者なんだ?」

ミートルはこの女性に気圧されて、おずおずと尋ねる。

彼女は声を張り上げて答える。

「これ以上悪党に説明する気は無いわ。さあ、さつさとやられなさい！ 悪役はやられる為の職業なのよ！」

あなた達はやられて金を巻き上げられて、さらに私は通行人さんから感謝の印を貰える。お互い、そういう“仕事”でしょ？」

「お、俺達を舐めてるのか！？ 俺達は盗賊……じゃなくて傭兵部隊ジャイアント・デスだ！ やられて金を巻き上げられるようなチンピラ連中じゃねえ！」

「どっちでも同じだろ？ 盗賊だろうとチンピラだろうと」
青年の静かな一言で、ミートルの火山は遂に噴火した。

「こ、こいつらあ！ 俺達が唯の盗賊団じゃねえってどこ、見せてやる！」

もはやミートルは自分で自分達のことを盗賊団だと言った事に気付いていない。……どうでもいいことだが。

青年は怒るミートルには目も呉れず、今さっき現れた彼女の動きに注目していた。彼女は普通に立つよりやや姿勢を低くし、右手は腰の後ろに回っている。

（なるほど……な）

青年は一つの確信を得る。と同時に、

「野郎共、こいつ等を叩きのめせ！！」

『おう！！』

ミートルの号令でゴロツキ達が一斉に、先ず彼女に襲い掛かった。女なら楽に倒せると思ったのだろう。だが、その目論見は直ぐに消えた。

彼女は右手で腰から銀飾に輝く“何か”を取り出した。

一瞬、彼女の右手にある塊が光ったと同時に、火花が弾けたような破裂音が街道に響き渡る。

瞬間、ゴロツキ達のうち二人が手に持っていた棍棒を地面に落とす、苦痛に表情を歪めて血を流す右手を反対の手で押さえ込んだ。

ゴロツキ達は一体何が起こったのかまるでわからなかったようだが、

青年だけは見えていた。

彼女が目にも留まらぬ“早撃ち”であっという間に二人に一発ずつ撃った瞬間を。

「こ、この女、銃持ってやがる!？」

「い、何時の間に撃ちやがったんだ!？ 全く見えなかったぞ!！」

残ったゴロツキ達は彼女の超が付く早撃ちを目の当たりにして、見るからに引き腰となっている。

(やるな。これなら俺の助太刀は要らないだろう。他の連中も腰が引けてるし……)

青年は周りを見渡し、そして気付いた。ゴロツキの幹部、ドルゴが弓矢で彼女を狙っている事を。

彼女は……気付いていない!!

(マズイ!)

そう判断した瞬間、青年は駆け出した。それと同時にドルゴは矢を放った。矢は彼女を指して一直線に飛んでいく。

突風のような速さで駆け抜ける青年は、腰から鞘を取り外し、それで飛んでいる矢を叩き落した。金属音が辺りに響く。

「なっ!？」

「え？」

彼女は何が起こったのかわからず、ドルゴはとんでもない光景を目の当たりにしたかのように驚いた。

それもそのはず。飛んでいる矢を叩き落す事など、常識では不可能だろう。その常識を青年はあっさりと覆したのだ。

皆が呆気にと取られていたが、青年は既に次の行動を起こしていた。一瞬でドルゴの眼前まで迫る。ドルゴがそれに気付いた頃には時、既に遅し。

青年は鞘から刀を抜刀し、神速の居合い斬りでドルゴの弓を真つ二つにして、鞘でドルゴの喉を突いた。

「うぐっ!！」

鈍い声をあげて、ドルゴは後ろに転がるように倒れ、そのまま動かなくなる。

次の相手はジョン。ジョンの槍はさっき確認したとおり、普通よりリーチが長くなっている。おそらく改造したのだろう。

「くそっ！」

ジョンは連続して突きを繰り返してくるが、青年は軽く避けてみせる。

次の突きを避けた瞬間に一気に間合いを詰める。ジョンは後ろに退いて間合いを保とうとしたが、青年の方が速い。

ジョンは今度は相手を薙ぎ払おうと槍を払ったが、それは鞘で受け止められ、逆に体がかがら空きになってしまったところに青年の鋭い蹴りが腹部に入る。

「ぐッ！　がはっ……」

短い呻き声を上げてそのまま倒れた。

と、青年は咄嗟に横に避けた。今まで青年がいた所でコイルの剣が空を斬った。青年はコイルの方に振り返らず、ミートルの方へと駆け出す。

ミートルは自分の方へ来るとは思っていなかった為か、少し対応が遅れたが仮にもリーダー格、青年が鞘で薙いできたが後ろへ飛んで寸前でそれを避ける。

一方、コイルは青年が予想外の行動を起こしたので一瞬躊躇ったが、直ぐに青年の後を追った。

しかし、後頭部に重い衝撃を感じると同時にコイルはその場に倒れ込む。何が起こったか分からないまま、彼の意識は遠のいていった。

グリップの底でコイルを昏倒させたリリイは、青年の方へ振り返る。

ミートルは拳や蹴りを繰り返すが、青年は簡単に避けたり受け止め

る。

ゴロツキ達で最早残っているのは彼一人となっている。残っていた手下二人は既に逃げていた。

「く、くそおっ」

情けない声を上げながら拳を繰り出すミートル。しかし、その前に青年の回し蹴りがミートルの頭に入った。

「ふがっ！」

ミートルの叫びと同時に動きが一瞬だけ止まるが、青年はその一瞬を逃さなかった。ミートルが気付いた時には既に青年の鞘の突きが脇腹に決まっていた。

「うぐっ…っ、強い……」

ミートルはそのまま後ろに倒れる。

かくして、（自称）傭兵部隊ジャイアント・デスは、あっけなく壊滅した。

「助けてくれてありがと。あなたって結構強いよね。何であいつ等が出てきた時に倒さなかったの？」

所代わり、ここは街中にある喫茶店。そこで、彼女が青年に尋ねた。

ミートル達を倒した後、青年と彼女はあの街道を真っ直ぐ行った所にある街へ向かい、この町の警備兵にミートル達の後始末を任せた。

今頃は駆け付けた警備兵によって捕縛されているだろう。その後、

二人はお礼も兼ねて近くの喫茶店に立ち寄ったのだ。

因みに彼女のクモの巣や木の枝などはこの街に来る前に全て払い除けた。髪も彼女持参のクシで直してある。

その後の彼女を青年は改めて見る。やはり美人である。実際、街中ですれ違った幾人もの男性の視線が彼女に集まっているのを感じた。

お互いに注文を済ませると、彼女は青年に尋ねた。

「相手の実力もわからないまま攻め込むのは危険だからな。例えば君に襲い掛かっていったゴロツキ達が良い例さ」

彼女の問いに青年は答える。

「ゴロツキ達は君が銃を持っていて、それに早撃ちが出来るつてのを見切れず、無闇に飛び込んでいったから君に撃たれた。そうだろうか？」

「まあ確かにね。でもそれって誰でも一緒じゃないの？ 相手がどんな武器持ってるとか、どの位強いだとか、初めて会った相手の事なんて分かるわけないし」

「お待たせしました」

丁度喫茶店のウェイトレスが注文を運んできた。とはいっても、二人とも飲み物だけ。青年は運ばれてきたコーヒーを飲みながら答える。

「まあ大体はそうだけだな。ちょっとした動作や言葉から相手の手の内を探るのさ。見切りって言っただけだ。」

ミートルみたいに俺の武器は素手だ、と自分の手の内を宣言するような奴は大抵の場合、大した事は無い。自分で自分の長所と短所を相手に教えているんだからな。

中には武器の技量に絶対の自信を持つ奴もいるだろうが、そういう奴は雰囲気でわかる」

「うん、実際に大した事無かったし」

彼女も即答する。ミートルの実力はゴロツキの中では上位かもしれないが、彼等にしてみれば所詮はゴロツキ程度である。

彼女も注文したアップルオレンジレモンティーを飲む。

（何味だ！？ って言うかあれって美味しいのか？）

青年はそう思いながらも彼女が普通に飲んでいる為、何も言えぬまま続ける。

「ここまでならある程度の奴ならわかるだろう。本当の見切りつてやつは、君のような人に効果を発揮するんだ」

「え？ 私？ どうして？」

青年はコーヒをテーブルに置いて、答える。

「例えば君がミートル達と話していた時、常に右手を腰のやや後ろに回していただろ？」

「！！」

彼女が動揺の気配を浮かべる。青年は構わず続ける。

「あれはいつ敵が襲ってきても対応出来るよう、腰に隠してある武器を直ぐに取り出す為だと俺は判断した。」

腰に隠せる武器って言えば短剣か、もしくはリボルバー式の拳銃くらいだろう。

それと、ミートルが襲うように号令を掛けた時、君は体勢を低くした。これは銃の反動に耐える為、連射する為の姿勢だ。

つまり、君の武器は拳銃ってわけだ」

彼女は驚きの表情を見せていた。どうやら全て凶星だったらしい。

彼女は肩を竦めて観念した。

「あの状況で、よくそこまで見てたわね」

そう言っただけで彼女は腰から二挺の拳銃を取り出してテーブルの上に置いた。

二挺とも六発リボルバー式。銀色の磨き上げられた銃身と握りやすく加工された樹皮のグリップは、これが工場の製品ではなく職人の技によって作られたものであることを示している。

そして、二挺のグリップ部にある鷹＜ファルコン＞のエンブレムを見て、青年は目を見開いた。

「まさか、ファール・シリーズか？」

驚いた事を隠さず、青年は尋ねる。

「ええ、そうよ。伝説の銃職人ファール・リクドウの作品、二挺一対の拳銃、『花鳥』と『風月』。」

レア・ファールには及ばないけど、精巧な造りは性能といい安定性といい、市販品とは比べ物にならないわ。

そして、私の生きる為の盾で、そして戦う為の矛よ」

彼女はそつと花鳥のグリップに手を触れる。この二挺の拳銃に、余人にはわからない思いがあるのだろう。

彼女は拳銃を腰にしまうと、再び青年へ向き直った。

「あなたって、本当に凄いのね。その見切りってやつだけじゃない、飛んでいる矢を叩き落す事なんて、普通はできないわよ」

と、今度は尊敬の眼差しで見てくる。

（うっ！）

咄嗟に、青年は彼女から顔を背けてコーヒーを一口含む。

「俺なんか別に凄くないさ、俺の師匠の方がもっと凄いぜ」

コーヒーを置いてそう答えるが、以前目は彼女から背けたままだ。

（あれ、もしかして照れてる？）

彼女は内心そう思い、からかうように青年をじっと見つめる。

青年は相変わらず顔を背けながら、時々コーヒーを手にとって口に運ぶ動作を繰り返す。

そして唐突に、彼女は話を切り出した。

「それで、謝礼の金額なんだけど、あなた幾ら持ってる？」

「ぶっ！」

青年は思わず飲みかけのコーヒーを噴き出した。

「汚いわね、なんで噴き出すのよ」

彼女の言葉に、青年は咽ながら答えた。

「ゴホッ……あ、あのなあ、謝礼ってなんだよ？」

彼女はキョトンとして、当たり前のことを言うように答えた。

「なに言ってるの？ あなたを助けてあげたでしょ？ だったら謝礼ぐらい当たり前でしょ」

「俺だって君の命を助けただろ？ それでおあいこじゃないのか？」

「命を助けたって、元はと言えばあなたを助ける為に危険な目にあったんだから、ね？」

「ね？　じゃない！　アンタが勝手に助太刀してきたんだろうが！　俺は助けてくれなんて一言も言っていない」

「それじゃあ私は何の為にあなたを助けたのよ！　なら弾代返してよ！」

ゴロツキ三人倒すのに三発撃ったから、あ、でも弾はセットだけでバラ売りしてないかワンセット代。

共通通貨＜ゴールド＞で5000ゴールド！」

「な！？　ふざけんな！　なんでワンセット代も払わなきゃいけないんだ！」

ワンセット百発入りだから三発で150ゴールドだ！」

「安すぎるわよ！　あなたには誠意ってもんが無いの！？」

「東のマフィアみたいな事言うな！　200、これ以上はない！」

「せめて4500！」

「断る、1000を超える気はない」

「ケチね、人の好意を仇で返す気！」

店員と客の冷ややかな視線を余所に、二人の議論はひたすら続いた。

空は完全に橙色に染まり、夕方から夜へと移り変わろうとしている。

「な、なら、それでいいな？」

「え、ええ。それでオーケーにしてあげる」

結局、今日の夕飯を青年が奢ることで決着がついた。両方とも数時間間の議論で疲れ果てている。

彼らはカフェを出た。とりあえずお互い同じ宿屋を取っているのので、行き先は同じだ。

この街では激安で有名な宿屋らしく、実際に値段を見て思わず商売成り立っているのか不安になるほどであった。

尤も、実はこれには裏があるのだが、彼らがそれを身をもって知る

のは数時間後の話だ。

「ねえ、今気付いたんだけど」

疲れているので一言も喋らなかったが、宿に着く寸前に彼女が話しかけてきた。

「なんだよ？」

彼女は確認するように尋ねた。

「私たちってまだ自己紹介もして無かったよね？」

「あ」

青年はここでようやく気づき、宿屋の前で二人は止まる。

「私はリアリスⅡホープ。リリィでいいわ。フリーの傭兵よ」

「俺はフーガ、フーガⅡヒリュウ。同じくフリーの傭兵さ」

数年後、世界にその名を知らしめる二人はこうして出会った。

第一章 第2話 〈Gang der Geschichte〉

テラス暦1089年、時は混迷の時代であった。

大国は自国の利益を求め、軍事力と謀略を駆使して利権の奪い合いを長年にわたって繰り返し、

また主義主張を名目にした反乱と革命が相次ぎ、世界中で地域紛争が絶えない日々が続いていた。

そんな戦乱の中に、戦争そのものを稼業とする者たち、傭兵の活躍が目立ってきた。

かつて、傭兵とはその場凌ぎの戦力であり、戦場の主役には程遠かった。

しかし長引く戦乱により、傭兵達は次第に団結し自ら部隊を編成した。

そしてテラス暦1021年、世界で五指に入る用兵家、傭兵ズーマによって史上初となる傭兵部隊「ファイス」が創設された。

初代総長ズーマ率いるファイスの活躍は目覚しく、彼らはやがて「戦場の王者」と呼ばれ畏怖されるようになった。

傭兵が戦場の主役となる時代の幕開けである。

その後、ズーマの全面支援の下、世界機関である「世界傭兵協会〈WMS〉」が発足。

それまで曖昧であった傭兵という稼業が法的に規定され傭兵の秩序とモラルが世界中に浸透し、

また相次いで傭兵部隊が創設された事もあり、傭兵業は急速に発達した。

今では無数にある傭兵部隊の頂点に君臨する二つの部隊、『カタストロフィ』と『ファイス』は大国並みの軍事力を誇っている。

少し、歴史の話をしよう。

何故、世界が戦乱の世になったのか。

その答えは、およそ100年前にまで戻らなければならない……。

世界には三つの大陸がある。

ウエスト大陸（通称「西大陸」）、ノース大陸（通称「北大陸」）、イースト大陸（通称「東大陸」）の三つだ。

当時は大海航行技術もそこまで発達しておらず、大陸間の交流は決して盛んではなかった。

特に西大陸と東大陸は、外海と呼ばれるほど航行の難しいレイス大海を挟んでおり、交流は皆無であった。

テラス暦980年、世界は新たな時代へ突入する。

西大陸の北東部に位置する新興国家ガイム帝国の天才科学者、ヴィンセンⅡセフィス。

彼が世界初となる動力機関、「ラグナバル機関」を発明したのだ。

ラグナバル機関はまさしく世界を変える力だった。

まず海上で巨大な鋼鉄の船を走らせる動力を得たことにより鋼鉄艦が生まれ、それまで主流であった木造の帆船を圧倒した。

そして、ラグナバル機関の強力な推進力によって、人類は鋼鉄の船で空を飛ぶようになった。飛空艇の登場である。

ガイム帝国で起こった『動力革命』から5年後のテラス暦986年。

世界最強の軍事力と最高の人材を揃えたガイム帝国は、リヴァース国へ武力侵攻を開始。

同時にガイム帝国のランギル將軍とシヴァ將軍の深遠な謀略により大陸中の各国の不穏分子が一斉に蜂起。

こうして大陸全土で戦乱の火蓋が切って落とされた。

『ガイム戦争』と呼ばれる西大陸全域を巻き込んだ戦いは、7年後のテラス暦993年、

ガイム帝国のウエスト大陸制覇というガイム帝国の完全勝利という形で終わりを迎えた。

ガイム軍はラグナバル機関を応用した工業力と兵器を持つだけでなく、それを運用する優れた人材も兼ね備えていた。

王たる器量と才覚、人の上に位置する者としてのカリスマを持つガイム帝国皇帝“覇王”アンスフェイドローエンガイム。

常勝不敗にして戦争の天才、若くして大將軍となり、ガイム軍を以って西大陸を席卷した“紫瞳戦神”ヴェルトレイオス大將軍。

優れた戦略家にして権謀術策に長けた政略家、驚異的な早さでガイム帝国の国内を整えたシヴァニコラスト將軍兼政務官。

癖のある人格故に緻密で冷徹な戦術家、謀略を張り巡らす“遊戯將軍”ランギルダステイナー。

ラグナバル機関の開発者にして“狂人”と畏怖される天才科学者、ヴィンセンセフェイス。

この五人を筆頭にして優れた人材を揃えたガイム帝国軍は、まさに覇軍となって破竹の勢いで西大陸を征服していった。

だが、西大陸を席卷したのも束の間、一つの覇道が終わりを迎えた。

ウエスト大陸制覇から僅か1年後のテラス暦994年。“覇王”アンスフェイド皇帝の病死である。

アンスフェイド皇帝に世継ぎはいない為、親類から新たに皇帝が戴冠した。

それは、ランギル將軍らが“愚者”と嘲るロイナーフェイラであった。

彼は戴冠すると名をロイアルフェイラガイムと改め、ヴェルト、シヴァらガイム帝国の立役者たちの、

「今は内政と情報収集に専念すべき」という進言を完全に無視し、新参の側近たちの甘言に踊らされるがままにノース大陸侵攻計画を

断行していった。

だが、テラス暦997年に計画は大きな支障をきたす。

ガイム帝国の重鎮や有能な者たちが忽然と姿を消し始めたのだ。

最初に行方がわからなくなったのはヴェルト、シヴァ、ランギル、ヴィンセンの四人。いずれも覇王と共に歩んだ者達だ。

それは『帝国の不明』事件と呼ばれ、今も世界史の謎として歴史家たちの研究対象となっている。

「ロイアル皇帝の怒りを買って密かに処刑された」、「謀略によって追放された」、「他国へ亡命した」など推測だけが飛び交っているが、

果たして真実は……。

ガイム戦争の英雄たち、そして政治、軍事の重鎮たちの突然の蒸発に、ガイム帝国の高官達は大いに混乱した。

しかし、ロイアル皇帝はそれでもノース大陸侵攻を諦めなかった。

そしてテラス暦998年、ガイム戦争終結から5年後、ガイム軍はラグナバル機関を駆使してガーデニア大海を渡り、北大陸へ侵攻を開始した。

『世界大戦』の始まりである。

北大陸へ侵攻したガイム軍だが、行き当たりばったりな戦略、明らかな情報不足、補給の軽視による前線の物資不足など上層部の無能さが目立った。

また兵士たちもガイム戦争を戦い抜いた一部を除いて士気が低く、現地の略奪や暴行が相次ぎ、軍紀は完全に乱れきっていた。

そこに、最強と歌われたガイム戦争時の覇軍の面影は無かった。

それに加えノース大陸は宗教色が濃く、「神が生まれた地」と言わ

れている。

北大陸は五つの宗教に分かれて互いに争っていたが、共通している事があった。ガイム軍は敵であるという事だ。

彼らは聖戦の名の下に死を恐れぬ戦いを繰り広げた。

それでも尚、ガイム軍が戦いに次々と勝利しえたのは空軍こと戦闘飛空艇（戦空艇）のおかげである。

空からの一方的な攻撃により、北大陸各国の奮闘空しくテラス暦1002年、北大陸はガイム帝国の版図となった。

しかし、この時既にガイム帝国の絶対的な有利性は失われていた。

ガイム帝国の技術者の一人が危険を冒してガーデニア大海を単独で渡り切り、イースト大陸へ亡命したのだ。

東大陸もガイム帝国の北大陸侵略について認知していた。そして、それが他人事ではないことも。

ガイム軍の北大陸全土占領が時間の問題となると、東大陸の各国は同盟を結び、ガイム帝国の侵攻に備えた。

そこへガイム帝国の技術者が亡命してきた。彼はラグナバル機関、飛空艇の設計技術を東大陸へもたらした。

有史以来最大の国家となったガイム帝国。ロイアル皇帝は、有史以来誰も成し得なかった大偉業を完遂せんと、最後の政策へ乗り出した。

テラス暦1003年、ガイム軍はイースト大陸へ侵攻を開始した。

それを万全の構えで待ち構える東大陸連合軍。

初めて経験する戦空艇同士の空中戦。鋼鉄艦同士の大海戦。地上での攻防。戦いは、始めから激戦であった。

戦局が連合軍有利へと傾いていく一方で、ガイム帝国は国内から崩壊しかけていた。

北大陸各地で蜂起が相次ぎ、ガイム帝国統治軍を翻弄していく。また、西大陸でも市民の不満は臨界点に達していた。

そして、ガйм帝国崩壊の序幕がついに幕を開ける。

東大陸での大敗北である。更に大陸撤退戦で全兵力の七割を失い、東大陸侵攻軍は壊滅した。

それを機に西大陸全域でも一斉に武力蜂起が発生、「解放軍」を名乗る彼らはガйм帝国統治軍を次々と打ち破り、祖国を解放した。祖国を解放した解放軍はガйм帝国帝都ベラルを目指して進撃を開始。

一方、北大陸でもガйм軍は敗北を重ね、遂には北大陸全土から撤退を余儀なくされた。

東大陸での大敗北、北大陸からの撤退、そして西大陸では解放軍が快進撃を続け、そして……、

テラス暦1008年、ベラル攻防戦の敗北により、有史以来最大の国、ガйм帝国は崩壊した。

『世界大戦』の終結であった。

しかし、世界の三分の二を支配した帝国の崩壊は、世界に予想以上の大混乱を巻き起こした。

今まで押さえつけられてきた民族独立運動、ラグナバル機関の燃料となるバル石を巡る対立など、世界中で新たな争いが起き始めた。

そして、「火事小屋に爆弾を投げ込んだ」と言われる新たな火種が東大陸の一人の学者から生まれた。

ヒューリックⅡヤブチが唱えた新国家構想、民主制の導入である。

「市民が行う政治」による戦争抑止を目的としたそれは、皮肉な事に世界中で市民と特権階級との対立を生み、世界は更なる混乱を迎えることになった。

そして現在、世界は各地で戦争、紛争が相次いでいる。

だが、人々は、この歴史の裏側に隠された真実を知らない……

そして、歴史は再び動き出す。

混乱と策謀と流血の世界にて、百年の刻を超えて……。

テラス暦1089年、世界は未だ混沌のままである。

第一章 第3話 〈Battle Of Restaurant〉

「師匠、何故わかってくれないのですか!？」

「お前の気持ちぐらいわかるさ、痛いぐらいにな」

「なら何故です!？ どうして僕が傭兵になるのを許してくれないのですか!！」

「では聞くが、何故傭兵になりたいのだ？」

「この戦争が終わるまでだけです! 自分の仲間達が命を賭けてこの国を守ろうとしているのに、僕だけ此処で修行なんてできません!！」

「お願いします、行かせてください!！」

「……どうしても、行くと言うのか？」

「はい」

「……そうか、ならば行くがいい。その代わり、お前は今日で破門だ」

「なッ!？」

「もう此処には戻って来るな。いいな」

師匠、何故なのです？ なにが、いけないのですか？

教えて下さい……師匠

「……ガ……一ガ……フーガ! 起きなさい!！」
ガバツとフーガはベットから起きあがった。

「やっと起きた。早く夕飯食べに行くわよ。あなたの奢りでね」
リリィが横で急かす。フーガは先ほど見ていた夢のせいかな、彼に
しては珍しくまだ頭がハッキリとしない。

「……せいっ!!」

ドスッと鈍い音と共に、リリィの拳がフーガの腹に入る。

「がはあっ!?!」

「目が覚めた?」

悶絶するフーガの顔を、リリィが覗いてくる。憎たらしい笑顔で…

暫く息ができなかったが、漸く落ち着いてきた。と同時に、

「行き成り何してんだ!?! もう少して気絶しそうになったぞ!?!」

と、リリィに猛抗議する。とても今日が初対面である相手に対する
対応とは思えない。

「大体、フーガが夕飯前だったのに熟睡しているのがいけないじ
ゃない。

それに気絶したらまた起こしてあげるわよ。今度はリボルバーの
銃底でね」

恐ろしい事を平気で言うリリィ。先ほどの行動を見た限り、彼女な
らば間違いないやるだろう。

もう一度言うが、とても初対面の人間に対して行う対応ではない。

「カフェでの約束どおり、夕飯奢ってよね」

「わかったって。夕飯ぐらいなら奢ってやるよ」

リリィは良しと頷くと、足取りも軽く部屋から出て行った。フーガ
もベッドを下り、リリィの後を追う。

二人は宿屋の二階から、食堂のある一階へ降りていった。

「……」

「……」

黙々と料理を食べるリリィ。それをひたすら見ているフーガ。

「……なあ？」

「……なによ？」

フーガは無表情でリリィに問う。何やらフーガから殺気が出ているのは、気のせいだろうか。

「昼にも言ったように、俺は“見切り”が出来るんだが、これは私生活でも応用できる。まあ要するに相手を見る目があるって事だ」

「ふーん。それで？」

リリィは満足そうにステーキをつついている。

「まあ、それで、だ。リリィがカフェで夕飯を奢ってくれたら許すって言った時、俺はリリィを見て考えたんだ」

「……エッチ」

「そんないやらしい眼で見てないから。……少しだけしか」

「……部屋の鍵は二重に閉めておくわ。あと銃は手元に届く場所に置いておくわね」

「冗談はさて置き、リリィは小柄だからそんなに食べられるはずが無い。そう思った訳でオーケーしたんだ」

「人を見た目で判断したらいけないって子供の頃に習わなかった？」

「ああ、それには同意する。でもな……」

フーガは一呼吸する。眼を閉じて、ゆっくりと開ける。そしてこれは現実だと改めて確認した。

リリィの目の前に置かれた皿の山、ステーキを平らげ、更にデザートを追加を注文するリリィを見て……。

「確かに人は見た目では判断できない。でもお前は異常過ぎだろ！」

「失礼ね！ 何処がよ！？」

「その小柄な体の何処にこの食堂のメニューを二周も看破できるほどの量が入るんだ！？」

店員からデザートが運ばれてきた。因みに、このデザートが二周目

のラストになる。

「今日はお腹が減ってたの！ 昼にどっかの誰かを助けたせいでね。それに今日はお金の心配しなくてもいいんだもん」

「遠慮って言葉を知らないのか？」

「だから、これでラストにしてあげるって」

「……」

（最早、何も言うまい）

フーガは無言でさっきデザートを運んできた店員が置いていった請求書を見る。

「……は？」

請求書を見て、フーガの動きが止まる。

フーガは暫く震える手で請求書を睨み付けると、手を挙げて店員を呼んだ。

「この請求書、ケタを間違えてるぞ」

フーガが言うのと、店員はにっこりと笑って言う。

「いいえ、間違っていないですよ。ですよね、店長？」

店員が呼ぶと、話を聞いていたのか奥から太った店長が出てきた。

「ええ、うちもビックリして何度も確認しましたから。それでは、どうぞごゆっくり」

店長と店員は去っていった。フーガは直ぐに請求書を改めて見直す。

が、結果は同じだったらしく、冷や汗が出ている。

「なによ？ まさかお金が足りない、なんて事は言わないよね？」

リリイはデザートを食べ終えてから満足そうな表情でフーガを見る。フーガは半ば放心状態でリリイに請求書を渡した。

リリイは請求書に眼を通した途端、満足そうな表情が一気に固った。請求書をじっと見詰め、手を挙げる。

「えーっと、すいませ……」

「ケタは間違っていないらしいぜ」

フーガの言葉に、挙げた手をゆっくりと降ろす。リリイは震えた声

で呟く。

「合計金額……12万7千ゴールド……」

二人とも顔は真っ青になった。そう言えば、さっきからあの太った店長がチラチラとこっちを見ているような……。

ちなみに、通貨単位のゴールドは世界共通である。

その流れの本流が、元々は世界の三分の二を席卷したガイム帝国の通貨単位「ゴールド」の名残であることは歴史の常識である。

「な、何でこんな高いのかな？」

「……多分あれだろ」

フーガは後ろの壁に、小さく目立たないように貼られているポスターを指差す。リリイは振り返ってそのポスターを見る。

『激安宿代！　そして高級メニューぎっしり！！　宿代気にせず彼方も高級食材を堪能しては如何！？　ようこそ、庶民の夢の宿屋「イッパンドリーム」へ！』

と、この店を紹介したポスターが貼られていた。

「つまり宿代が激安な代わり、食事代が高いつて事だな。因みに俺はたった今そのポスターに気付いた」

よくよく見れば、メニューにも値段が書かれていない。宿代の安さから、食事もてっきり安いものだと思っていたが……。

「先入観を利用した巧妙なトリック。……やるな」

「詐欺じゃないそれって！！」

澄ました顔で言ったフーガ、テーブルに肘をついて頭を抱えるリリイ。やがて、リリイが顔を上げた。

「……フーガ、幾ら持ってる？」

「10万ゴールド、ギリギリ有るか無いか、だ。リリイは？」

「7万ゴールドだけど……って、まさか私も払うの！？」

「嫌か？」

「もちろん！」

「なら、俺は食い逃げさせてもらうか」

（昔、アレに逃げ方は一通り教わったからな。物凄く不本意だが…

…)

そう心の中で呟くフーガ。

「へ？」

「リリイ、後は任せたぞ！」

呆けているリリイを他所に、フーガは瞬時に荷物をまとめて椅子から立ち上がる。

同時に店員たちも行動を開始した。

三人の店員が外への出口を固め、二人の店員が二階の宿へと続く階段を固める。そして先ほどの店長が笑顔でこちらに向かって歩いてくる。

いくら顔は笑顔でも、店長、いや皆が緊張した表情を浮かべていた。

フーガの視線が出口の三人に向けられる。それに気付いた三人は、そばにあったモップをそれぞれ手に取る。

(出口には三人！ やれるか！？)

今にも襲い掛かりそうな店員達を、店長が視線だけで宥める。店員達と店長はアイ・コンタクトで会話をしていた。

――待て！ まだ早い！ 冷静になれ！――

――しかし店長！ もう彼らはヤル気です！ ここで先手を取らなければ……！――

――焦るな！ 大丈夫だ、訓練通りにやればいい！――
(こいつら、やる！)

完全にマスターされたアイ・コンタクトの会話を目の当たりにして、フーガの額に一滴の汗が流れる。

そして、店長がフーガ達の席へと近づいてくる。

(チャンスは……一度きり！ 俺に出来るか！？ いや、やるしかない……！)

荷物を持つ手に力が入る。そして……！

「ち、ちよっと待った！ わかった、わかったわよ！ 払うからフーガ、ストップ！」

横からの思わぬ邪魔にフーガの気を削がれた瞬間を、店長は見逃さなかった。

その瞬間、彼はその体格にまるで合わない加速力を出す。勿論、歩きのままで。

「しまっ……！」

フーガが気付いた時には、店長はフーガ達のテーブルの傍に立っていた。

彼は勝利の美酒を味わいながら、にこやかな笑みを浮かべて言った。たった一言、

「お客様、お会計ですか？」と。

この瞬間、フーガの敗北が決定した。

「うう、なんでこんな結果になるのよ」

敗者の表情を浮かべて撃沈しているフーガの隣では、リリイが財布を出していた。

結局二人でお金を支払う。そしてリリイは兎も角、フーガは無一文になってしまった。

「うう、私のお金があ……」

二階の宿にある一室、フーガが泊まっている部屋に二人はいた。

「……弾代ワンセット、1万の方が安く済んだな。如何やら今日の俺の運勢は最凶らしいな。」

盗賊に絡まれるし、俺は何もしてないのにお金が無一文になるし」

「それにしてもなんか落ち着いているわね、フーガ」

この状況で冷静でいるフーガを見て、少しだけ感嘆するリリイ。

「なに、“諦め”の境地つてのを悟っただけさ」

「……」

直ぐに心の中で前言撤回するリリイだった。

「……それで、リリイはこれからどうするんだ？」

行き成り会話を振られて、リリイは軽い驚きの表情を浮かべた。

「え、私？ うーん、特に何処にも行く予定なんて無いし、お金けっこう無くなっちゃったし、どうしようかな……」

「ならいい話があるんだが、いいか？」

「いい話？」

リリイの問いにフーガは「ああ」と答えて、言った。

「とにかく、今はお互い金を貯めなくちゃならないだろ？」

だが、豪邸や国の施設の警護といったアルバイトみたいな仕事じゃ、一週間の旅費程度しか儲からない」

「昔と違って、街中にまで出没する盗賊団なんて滅多にいないからね」

「そう。だから俺らみたいな傭兵が一番儲かるのが……」

「武装化した盗賊、テロリストの討伐。そして内乱、紛争、戦争といった類ね」

リリイの言葉に、フーガは頷いた。

「そういう事だ。此処から北西にユーラス国があるだろ？」

そこで何やら傭兵を急募しているらしい。内容は良く知らないけど、結構な額が出るって噂だ。

「どうだ、行く宛てが無いならそこまで一緒に行かないか？」

リリイは暫く考えて答える。

「まあ、いいけど。もしかして、そこまでの旅費は……」

フーガは不敵な笑みを浮かべる。

「生憎、俺は無一文でね」

リリイはわざとらしく溜息を吐くと、

「後で絶対に返してもらおうからね」

と、答えた。

第一章 第4話 〈ZeroⅡNight〉

西大陸北東部 ガラムル共和国 首都ベラル

ガラムル共和国、およそ百年前まではガйм帝国と呼ばれていた国である。

テラス暦1008年の解放戦争によりガйм帝国は滅び、新たにガラムル共和国として歴史を踏み出している。

この国に本部を置いている傭兵部隊は唯一つしかない。だが、その傭兵部隊は世界で最強と謳われている。

傭兵部隊『カタストロフィ』。

破滅の名を冠したこの傭兵部隊は、テラス暦1072年に創設と比較的歴史はまだ新しい。

それにも関わらず、現在では王者フェイスと互角、いや、火力などを比べれば実際はそれ以上であろう戦力を持ち合わせている。

構成人数は傭兵から技術者など合わせて一万人以上。そして飛空艇、戦空艇隊と独自の航空戦力を所有している。

その数は凡そ100隻に及び、何れもラーズグランド社製の飛空艇である。

大国と呼ばれる国家や、“王者”と称されている傭兵部隊「フェイス」の航空戦力でさえ50隻程度の航空戦力しか持たない事を鑑みれば、

その二倍の航空戦力を持つカタストロフィの比類なき軍事力がわかるであろう。

その本部がここ首都ベラルの西側街外れの郊外にある。だが、その本部の広大さは、都市ベラルの二分の一ほどの大きさがある。

因みに、ベラルの南側郊外には、世界最大で最高の技術力、生産力、経済力を自他共に認める巨大企業、ラーズグランド社の本社がある。

この企業の敷地内にはラーズグランド本社「ユグドラシル」があり、

その眼下には巨大な工場郡が立ち並んでいる。

ガйм帝国の屠られし土地に、最強の傭兵部隊カタストロフィと、最大の企業ラーズグランド社がある。

必然的に、“裏に何かがある”と世界中の誰もが推測しているが、それが何なのか、張本人達を除いては世界で誰一人としてわかっていない。

現在、カタストロフィ本部に無敵艇隊の勇姿はない。艇隊はベラルの遙か西、西大陸西部に位置するイルム帝国にいた。

カタストロフィの百隻の艇隊が停泊しているのはイルム帝国首都ラズグラードの郊外に作られた臨時仮設港である。

傭兵部隊の利点として、守るべき領土が無い彼らは全軍を戦場に投入できる事が挙げられる。

相手国にとって、空を覆う鋼鉄の船の群れは、まさに悪夢そのものだろう。

旗艇「ハザード」ブリッジ

「首尾はどうか？」

彼の名はゼロニヒツ。カタストロフィの総司令官であり、たった十数年でこの部隊を築き上げた創設者だ。

白肌、黒髪で瞳も黒く、歳はそんなに若くは無いはずなのだが、彼の見た目はまだ三十代前半のように見える。

漆黒の鎧を纏っており、白い肌に黒尽くめというところに、またその優れた容姿から、威圧感とも呼べる雰囲気漂い、カリスマ性を感じさせられる。

ゼロは静かにこの旗艇ハザードの艇長であり、カタストロフィ軍唯一の参謀でもあるウェンライトニウスに聞いた。

金髪碧眼、蒼い瞳には強い意志を感じ取る事ができ、自らに対する

自信が伺える。

「ハッ！ 全艇、最終チェックに取り掛かっております。後三十分程で完了するかと」

ウェーシライトの言葉にゼロは無言で頷くと、司令長官の座る椅子に腰をかけた。

暫くして、一人の士官がブリッジに上がってきた。

「將軍、来客であります」

ゼロは殆どの者に「將軍」と呼ばれている。

誰が言い出したのかは不明で、彼がカタストロフィを創設し、確固たる地位を築いた頃にはそう呼ばれるようになっていた。

ゼロ自身は自分が何と呼ばれようが気にしないという感じであり、仮に一人の兵士が廊下を歩いている彼を呼び捨てにしたところで、目にも留めず、何も言わずに通る過ぎるだろう。

尤も、実際に彼を呼び捨てにする兵士などいないであろうが……。

「誰だ？」

彼は自らの来訪者を知る為の最低限の言葉を発した。

「ハッ、イルム帝国軍総司令官、ヴァトル元帥閣下であります」

部下からの報告を聞くと、彼は無言でまた頷いた。

「応接室に通しておけ」

「了解しました」

報告にきた士官は、ヴァトルを迎えにブリッジから出て行った。

ゼロは正に世界が認める実力者であった。それと同時に、彼ほど総てが謎に満ちている人物も珍しいだろう。

彼はフリーの傭兵時代、たった一人で多大な戦果を挙げ続け、すぐさまその名を世界に轟かせた。

一躍有名になると、彼はテラス暦1072年に傭兵部隊「カタストロフィ」を創設、僅か18年で世界最強の傭兵部隊を創り上げた。このような短期間でカタストロフィが伝統ある傭兵部隊、“王者”ファイスと互角となった最大の理由として、

そのバックに大企業ラーズブランド社が付いているからだ、というのが周知公然の秘密である。

「私が戻るまでに全てのチェックを終了させておけ」

彼はウェーソライトにそう言い残して、ブリッジを後にした。

艇内の廊下を歩いていると、向かいから二人の兵士が歩いてきて、ゼロの存在に気付いて慌てて敬礼をしたが、彼は目も呉れずに歩き去った。

兵士達に言わせるなら、それが当たり前であり、応礼するゼロなど想像も出来ないというところだろう。

応接室のドアを開けると、既にヴァトルが到着していた。

「ヴァトル元帥閣下、何用ですか？」

一国の軍の最高司令官に対してだというのに、ゼロの第一声は実に素っ気無いものだった。

応接室はそれなりの広さがあるが、戦闘用の飛空艇なのでテーブルとソファと、申し訳程度の質素な飾り付けしか置いていない。

ヴァトルは一瞬だけ顔をしかめたが、すぐにいつも通りの笑顔を作り、肥満な身体をゆっくりと持ち上げながらソファから立った。

「いやなに、今回の作戦で最も重要な役を貴殿の艇隊が担当するらしいというのを聞きましたので、激励をしようと思ひましてね。ゼロ將軍」

表面は愛想をもって笑っているが、内心では不服なのが目に見えてわかる。

なにしろこの作戦は本来、ヴァトルが自ら立案したものが採用される予定であった。

だが、カタストロフィがイルム帝国からの参戦依頼に応じると、ゼロが新たな作戦案を提出してきたのだ。

ゼロから提出された案は当初、無謀ではないかと軍部は懸念したが、イルム帝国の皇帝と軍部はゼロ將軍が立案したものだからと最終的にはゼロの作戦を採用した。

尤も、ヴァトルは軍政に関しては一流といえるだろうが、軍令に関しては三流というのはイルム帝国軍部総意の評価だ。

そんなヴァトルが立案したものより、百戦錬磨にして戦争の天才であるゼロの作戦を採用するのは当たり前といえど当たり前だろう。

ヴァトルが考案した作戦の暗号名は「真紅の雷」といい、本来の作戦内容を簡潔に纏めるとこのようになる。

1…イルム帝国第二軍、第三軍、第四軍の三軍からなるトラディットオ攻略部隊がユーラス国の主要都市であるトラディットオへと進攻、占領する。

2…敵国首都カルニアから出撃してきた敵主力を、トラディットオ南部の丘陵地帯にて待機していたイルム軍第一軍がこれを迎撃。

3…その間、トラディットオ攻略部隊は南進し、第一軍と合流、敵軍と交戦し撃退する。

4…敵国首都カルニアへ進攻、占領する。

5…各軍はカルニアを拠点としユーラス国の各地へと進攻。敵残党軍の抵抗を排除し、占領を完全なものにする。

6…尚、第五、第六、第七、第八軍の四軍は後方にて待機。北、東からの有事の際に備える。

確かにこの作戦通り、上手くいけばユーラス国は近い未来、過去の存在となっていただろう。

尤も、あくまで“作戦通り、上手くいけば”、である。

机上の作戦会議では、敵は自分達の思惑通り動いてくれるものだ。それを心得ている者こそ優秀な将校であり、それを心得ていない者は歴史上で無能のレッテルを貼られる。

ヴァトルがどちらであるかは、今後の実績によって何れ歴史が証明するだろう。

だがこの作戦、実はユーラス国側の“とある諜報員”の活躍で相手

に筒抜けの状態だったのだ。

よってこの作戦通りイルム軍が行動を起こしていれば、トラディツオは強固な防衛によって占領を阻止し、第一部隊は逆に奇襲を受け敗走していたに違いない。

だが、今度はその情報がカタストロフィ独自の諜報部隊、「第九八〇特別任務部隊」、通称「特務隊」の手でゼロの下に伝わった。

ゼロはその情報を“敢えて”イルム軍には伝えず、新たな作戦案を提出した。

よって、イルム軍は未だ前回の作戦内容が敵に暴かれていた事を知らない……。

「わざわざ総司令官であるヴァトル元帥閣下自らが激励に来てくださるとは、恐れ入ります」

ヴァトルの態度などまるで気に留めていない様子でゼロは軽く頭を下げる。

ヴァトルはかるく鼻を鳴らした。

「この作戦に我が国の存亡が懸かっているのだ。絶対に成功させなくてはならんのだよ。我が皇帝は我々正規軍よりも貴殿を相当信頼しておるようだ。

なにせ貴殿の立案した作戦を採用したのだからな。貴殿自らが立案した作戦だ。まさか全滅という事態は避けてくれたまえ。ジェネラル、ゼロ」

ヴァトルのあからさまな嫌味に顔色一つ変えず、ゼロは頷いた。

その後、軽く作戦の最終チェックを行い、ヴァトルは最後まで内心の不服を隠しきれぬまま、イルム軍の総てを統轄する総司令部へと帰っていった。

よほど自分の作戦が採用されなかった事が不服らしい。ゼロはヴァトルを見送り、そのままブリッジへ戻る。

「各自チェックは済んだか？」

ブリッジへ戻ると、ゼロは何事も無かったかのように艇長に問う。

艇長のウェンライトもすぐさま答える。

「ハッ、全てのチェック完了致しました。全艇出撃可能です」
ゼロは小さく頷く。

「出撃は予定通り、本日二二〇〇だ。各艦にも伝えておけ」

ゼロはウェンライトにそう言うのと、ブリッジからまた出て行った。

廊下をしばらく歩いて行くと、司令官室の前に出る。彼は司令官室のドアを開けて、中に入った。

司令官室は応接室の半分ほどの広さしかない。更に本棚と机が置いてあるのでより狭く感じられる。

ゼロは壁の金庫を開け、中から一枚の白い封筒を取り出す。

その封筒はラーズブランド社のものであり、封筒の表面には、

「極秘機密レベル5」

と記されている。

レベル5とは最高位の機密情報であり、ラーズに連なる者が見れば驚愕するであろう。

その封筒の封を、手慣れた手つきで切り書類を取り出し、ざっと内容に目を通す。

ゼロはそれを一通り読み終え、書類を封筒に戻すと、机の上に貼られている世界地図に手を伸ばした。

地図の端に指を掛けると、ゆっくりとそれを剥がす。地図を剥がしていくと、地図の下にもう一枚の世界地図が表れた。

その地図は全体的に色あせていて、所々が切れている、随分と古い地図だ。

その地図の西大陸と北大陸には、たった一つの国名しか記されていない。有史以来最大の国家になった国の名だ。

「優越感と劣等感のコインの表裏と同義だ。それに気付いていないのか、気付いているが認めたくないだけなのか。

どちらにしろ哀れなものだ。ヴァトルIIグラール」

地図を見ながら、ゼロは静かに呟いた。

ゼロは机の引き出しからマッチ箱を取り出して、マッチに火を点けた。

その火を、手に取った封筒に移す。封筒はすぐに火に包まれた。燃える封筒を屑籠の中に捨てると、ゼロは席を立て部屋から出て行った。

燃えゆく封筒、そのおかげで僅かだが中の書類が垣間見えた。だが、それもすぐに火に包まれてあっという間に灰になっていく。

ただ、書類の一番上の段には、

「アイオン・プロジェクト途中経過定時報告連絡書」と書かれていた。

第一章 第5話 Ⅰ I L U M E & Y U L A S Ⅰ

イルム帝国。

かつてガイム帝国との解放戦争の際、西大陸西部地域をガイム軍から解放した英雄、第二解放軍の指揮官イルムⅡアルバーゼが建国した大国である。

首都は“外海”ことレイス大海に接する西海岸にある港街ラスクラート。

建国当時、イルム帝国は西大陸西部の覇権国家であった。そしてそれを、周辺の各国は好意的に認めていた。

初代皇帝ことイルムⅡアルバーゼは各国との共存共栄を目指し、協和を前提に外交を行っていたからだ。

当時の西大陸西部の情勢は、イルム国を中心として各国は平和を享受していた。

いつからなのだろう。イルム帝国が“平和維持国家”から、“軍事国家”へと変貌を遂げたのは。

イルム帝国が革命に危機感を覚え、軍備増強を行ってからだろうか？

それとも、イルム帝国の南に存在した五つの小国が合併し、新たに大国、ユーラス国を建国した時からだろうか？

いや、おそらくは、アルバーゼが死去した後からであろう。

アルバーゼの死去した当時、世界は緊張に包まれていた。

共通の敵であったガイム帝国を失った各国は、再び対立を始めていた。

独立を巡る対立、バル石の鉱山や豊穡な土地、港を巡る利権問題、王家の存続争いなど世界中で紛争の再発が深刻化しつつあった。

それでも、小競り合い程度ならばあったが、世界大戦の悲惨な戦禍を目の当たりにしていた彼等は戦争という手段を行使する事に慎重

になっていた。

だが、時間は人に忘却を行使させる。

そして、世界は緊張状態から、一気に世界戦争へと突入した。

東大陸のヴァレス国の学者、ヒューリック・ヤブチが、

従来の王政もしくは皇帝主権を根本から覆す新国家体制、市民自らが政治を決めるという「デモクラシー体制」を世界に発表し、

そして、それをヴァレス国元老院最高議長である国王と元老院が導入を決定し、世界に初めて民主制の国家が誕生した。

この「火事小屋に爆弾を投げ込んだ」と言われる一連の出来事によって、世界に未曾有の混乱が訪れた。

イルム国は、国民の間に英雄アルバーゼが建国した国家であるとの認識が強かったため、世界中の“革命騒ぎ”とは無縁であった。

だが、イルム国と北方の国境に接するハイベル王国では革命が起き、それが成功した。

革命後、王族は全て処刑され、ハイベル王国は国名をハイベル連邦共和国と改めた。

この報せにイルム国は危機感を覚えた。今のところ、イルム国には革命の雰囲気はない。だが、今後はどうだろうか？

ハイベルはイルムのすぐ北だ。その革命の余韻がこちらにまで押し寄せてくるのではないだろうか？

『ハイベル革命』後、イルム国は大幅な軍備増強を決定した。

それに今度は危機感を覚えたのが、南方に位置していた五ヶ国である。

国土も経済力もイルムに遠く及ばない小国である五ヶ国は同盟を結んでいた。

それはそれぞれの国名の頭文字を取って「ユーラス連盟」と名称された。

ユーラス連盟のおかげで、五ヶ国はイルム国に次ぐ国力を持つに至

った。それは軍勢力も同じであった。

だが、イルム国の軍備増強によって、その均衡は崩れた。

いくら国力は同等であっても、五ヶ国による連盟である。五ヶ国間にそれぞれの利害関係があるため、どうしてもイルム国に遅れを取ってしまう。

そこに更にイルムの軍備増強である。軍備増強は国内の維持というイルム国の公式な発表であったが、果たして本当だろうか。

イルム国には革命の気運などまるで無いではないか。これはもしか、イルム国に侵攻の意図があるのではないか。五ヶ国はそう判断した。

イルム国に侵攻の気配あり。それはユーラス連盟の指導者達を恐慌に陥れ、そして決断させた。

ユーラス連盟にとって極秘の最終目標、それは五ヶ国を合併させ、イルム国に代わってこの地域の覇権国家となることであった。

その為の準備も極秘のうちに進めていた。ならば、今こそ「ユーラス国家」を建国しようではないか。彼等は決断した。

かくして、西大陸西部に新たな国家、ユーラス共和国が建国された。他国にとって、いやユーラス連盟五ヶ国の国民にとっても寝耳に水、蒼天の霹靂であった。

ユーラス共和国は各国や国民が咄然としている中、素早く、着々と国家としての組織を推し進め、造り上げていった。

だが、それを好機として動き始めた者達がいた。俗に言う「民主革命家」達である。

彼ら五ヶ国間で連携をとり、いつでも動けるよう準備を怠り無く進め、機会を伺っていた。そこに合併による混乱である。

更に国民はこの急速な展開に付いていけず、不安と不満を募らせていた。彼らは行動を開始した。

五ヶ国はユーラス国となったが、政治の決定はそれぞれの指導者達の話し合いで決まる。

建国当初のユーラス国は共和制であり、同時に君主制だったのである。それを彼らは最大限に利用した。

「指導者達は私利私欲のために祖国を売り、自分達の“庭”とした。このままでは彼らは戦争を起こすだろう。それを阻止するためにも、今こそデモクラシーを！」

彼らはそう宣伝して周り、圧倒的な賛同を得た。

国民達は「今こそデモクラシーを！」を合言葉に、武器を取って新興首都カルニアへと向かった。

軍部の再編が予想以上に手間取り遅れていた為、叛乱を抑えようにも組織的に完成されていない軍隊は叛乱軍に敗北。

王都は“私利私欲な指導者達”から解放された。

北にはハイベル連邦共和国。南には新生大国ユーラス国。東には王が健在するが議会制を取り入れ、憲法を作り開明的な政治を行い始めたクラーク王国。

イルム国は国際的に周囲から孤立し、ただ国内外の有事に備えての軍備増強を行い続けた。

イルム国の飽くなき軍備増強に危機感を覚えたユーラス、ハイベル、クラークの三国は連携し、イルム国に提案書を差し出した。

和平条約を締結し、互いに軍縮を行おうと。

ユーラスとしても、「戦争回避」を名目に革命を起こし、権力の座を篡奪した経緯がある。

イルムとはいずれ覇権を巡って対立するであろうが、今は実績をユーラス市民に見せつける事が急務であった。

この軍縮提案にイルム国皇帝は賛成した。既に軍費だけで膨大な予算がすぎ込まれており、軍備の現状維持だけでも危うい状況だった。

イルム国は同意の意を示すためにユーラス国に使者団を送った。

その使者団はユーラス国に入国し、ラクリアという地域に差し掛かった所で、殺された。

唯一生き延びた者の話では、ユーラス軍の鎧を着た者達に殺されたらしい。だが、彼はその後すぐに“事故”にあって死亡してしまった。

この一連の大事件は『ラクリア事件』と呼ばれ、そして真相は謎に包まれたままだ。

唯一、犯人に繋がるのは、あの証言だけ。

ユーラス国は頑強に否定したが、ユーラスとイルムの関係は最悪になった。

ちなみに、これは推理小説ではないので犯行の首謀者をずばりと割り出すことは出来ないが、ある程度まで絞り込むことは出来る。要点は、

- 1、殺された使者達は和平と軍縮の使者であつた。
- 2、彼らが殺されたことで、両国間の関係は最悪になった。
- 3、犯行グループは国内、国外でも知る者の少ない使者達の通路を知っていた。
- 4、犯行グループはユーラス軍の鎧を着ていた。
- 5、少なくとも首謀者は、それで利益を得ることが出来る人物もしくはグループ。

最悪の関係にまで陥った両国が、武力衝突を起こすまで大した月日は要しなかった。

ラクリア事件から2年後、国境線を巡る小規模な衝突が発展し、両国は戦争状態に突入した。

単純な国力比ならばイルム帝国の方がユーラス国を上回っている。だが、イルム帝国の敵はユーラスだけではなかった。

クラーク王国は内陸に存在するため良好な港を求めて西海岸のイルム国を虎視眈々と狙っており、

軍事的にも軍隊の近代化は経済的な理由から停滞しているとはいえ、白兵戦では圧倒的な強さを発揮するクラーク王都騎士団を抱えてい

る。

極寒の大地で鍛え上げられた陸兵を持つハイベル連邦も、温暖な氣候のイルム帝国の領土への侵略準備を黙々と進めている。

他国に比べ強大な軍事力を持つイルム帝国だが、南のユーラスだけではなく、東と北にも国境線に戦力を振り分けなければならない為、多数の兵力を削がれたイルム帝国とユーラス国の戦争は、幾つかの休戦を含め、長らく決着が付いていない。

だが10年前の大規模な市街地戦であるトラディツオ攻防戦で、均衡は破られた。

国際都市であるトラディツオを攻撃したイルム帝国に対し、クラーク王国とハイベル連邦はユーラス国主導の下に経済制裁を実施。

この三国によってイルム帝国は陸路を封鎖され、また度重なる戦争の負担によって経済に大きな打撃を受けた。

まだ海上からの貿易によって何とか持ち応えているが、このままではイルム帝国が経済破綻を起こすのは目に見えていた。

時が経つにつれて、木綿で首を絞めるが如く、じわじわとイルム帝国は崩壊への道を歩き出している。

その現状を打破する為、イルム帝国は文字通り、乾坤一擲の大勝負に出た。

世界最大、最強の傭兵部隊カタストロフィと契約を結んだのだ。カタストロフィは傭兵部隊としてファイスに次いでランクSクラスを持つ。

当然、契約金は他の部隊とは桁が違う。

契約金額を確認したイルム国の経済担当者が、その金額を見て卒倒し、その日から僅か一週間で胃に大穴が空いた。

契約期間はたった一ヶ月だけだが、経済破綻寸前のイルム国にとって、カタストロフィは最後の頼みの命綱となった。

さて、ユーラス国である。

現在、ユーラス国は東のクラーク王国、北のハイベル連邦と「イルム包囲計画」を実施している。

このままいけばイルム帝国はそう遠くない未来に自滅するだろうと、ユーラス国はそう考えていた。

しかし、どうも最近イルム軍部の動きが怪しい。報告では、どうやら戦争の準備を整えているらしい。

勿論、ユーラス軍も直ちに防衛準備に取り掛かった。だが、詳細を知ったユーラス軍部は度肝を抜かれた。

イルム帝国は残り僅かな国費を使い、カタストロフィに援軍を頼んだというのだ。この報告にユーラス軍部の狼狽は凄まじいものがあった。

イルム軍だけならまだしも、大国並みの戦力、そして最新鋭の兵器を持つ戦争の玄人達、カタストロフィを相手にどれだけ持ちこたえられるだろうか。

ユーラス軍は友好国であるジパン皇国の影響で兵士達に猛訓練を課しており、兵士の質はカタストロフィに負けずほど高い。

だが、問題は将校の方だ。ユーラス軍部は10年前のトラディットオ攻防戦の時、イルム軍総司令官グラマン元帥の戦術の前に多数の将校を失った。

その後の10年間でユーラス軍は将校を補充出来たが、実戦経験が乏しく、何よりも官僚的な軍隊となってしまうことは否めない。さらに凶報は続く。ハイベル連邦とクラーク王国はカタストロフィの外交圧力によって一時的な中立を宣言した。

カタストロフィの凄さは此処にもある。要するに、「侵攻して来たらお前等も潰すぞ」という脅しである。

実際、ゼロ率いるカタストロフィが本気で攻めて来たら、国の一つや二つは軽く滅ぼせるだろう。

ハイベル連邦とクラーク王国はこの「外交」の前に屈した。

かくして戦力比でも敵の方が圧倒的に上回ってしまった。

更に敵将は戦争の天才、ゼロ將軍である。イルム国総司令官のヴァ

トルが立案した作戦は、事前の諜報で大体はわかっていた。

だがゼロが新たな作戦案を提出し、更に情報封鎖を厳しくしてしまったせいで、敵がどのような作戦で何処を攻めてくるのかわからなくなってしまった。

一時は「カタストロフィに唯一対抗できる傭兵部隊ファイスに援軍を依頼する」という案が出たが、肝心のファイスは現在北大陸の戦争に参戦中で此方に来れなかった。

ユーラス国が議論に議論を重ね、幾度も検討して出した答えは、「こちらにも出来る限り傭兵部隊やフリーの傭兵を雇い、兵力を増やす。」というものだった。

この案はすぐさま実行され、西大陸西部各地に傭兵募集の情報を撒いた。

そして、この情報を何処かで聞き入れたファーガッヒリュウは、偶然的な出会いを果たしたリアリスⅡホープと共に、ユーラス国へと向かう。

運命という名の力が、この地にて再動の気配を見せ始める。

そしてそれが偶然であるのか、必然なのか、

誰も知ることはできない。

神すらも知る術を持たない。

何故ならば、

運命を動かす事が出来るのは、

神ではなく、人なのだから……。

第一章 第6話 く傭兵ランクく

フーガ達がユーラス国を目指して出発してから二週間後、二人はユーラス国首都カルニアに到着した。

西大陸西部に存在するイルム帝国、ユーラス国、クラーク王国、ハイベル連邦共和国。

現在、これら四ヶ国の都市の中で最も繁栄しているはずの都市カルニアは、

今ではあちらこちらにバリケードが設置しており、紺碧の鎧を着たユーラス軍兵士が仕切りなしに巡回している。

ちなみに、西部が平和であれば最も栄える都市は変わっていただろう。

「国際都市トラディツオ」。北西にイルム、北にハイベル、東にクラーク、南西に首都カルニアへと街道が続き、

文字通り「国際都市」を目標として建設された都市だ。

それ故に、戦争になるとその都市は戦略的に高い重要性を持ち、10年前のトラディツオ攻防戦の悲劇が生まれた。

街を行く人々も良く見てみると、兵士と傭兵の姿が多い。逆に市民の姿が少なく感じる。店もその殆ど閉まっている。

「どうやら、市民のほとんどが戦禍を恐れて疎開したみたいだな」

「そりゃあそうでしょ。敵が絶対に狙ってくるのはここなんだし、それに相手はカタストロフィなんだから。逆に私達の仕事が遣り易くなって良いんじゃない？」

「カタストロフィ……か、まさかカタストロフィ絡みだったとはな。死なない程度に頑張るとしよう」

フーガの言った言葉が、普通の傭兵がカタストロフィ、ファイスといった高ランクの傭兵部隊に抱く感情を簡潔に表わしている。

「それじゃ、仕事でも貰いにいくか」

フーガの言葉にリリイも頷く。二人はユーラス国軍総司令部へ向か

った。

傭兵が国と契約するには、都市毎にある軍の施設等の受付でサインし、ランクと証明書を表示する事で成立する。

ランクとはその人、又は部隊の評価を表すもので、一般ではH（Aクラス）までである。

また、世界トップクラスになると名誉のSクラスが貰えるが、現在そのSクラスを所持している傭兵は世界でカタストロフィの“將軍”ゼロ、ファイスの“総帥”ネルソンを含め数人しかない。

部隊に至ってはそのカタストロフィとファイスの二部隊のみである。

フーガとリリィは総司令部の敷地内へ入り、手前にある小さめの建物へ向かう。そこが受付であり、奥のほうにある大きな建物が総司令部だ。

無論、そちらへ続く道は厳重な警備が布かれている。

建物内に入ると、受付だというの中はかなり慌ただしい。

（受付でこの騒ぎじゃあ、総司令部の司令室は物凄い状態になってそうだな）

フーガは内心そう思いながら、受付の女性に声を掛ける。

「この国で傭兵を募集していると聞いたが、フリーの傭兵二人分空いているか？」

「はい。まず証明書を表示してください」

受付の事務的な応答に従い、フーガとリリィはそれぞれ証明書を受付に渡した。

彼女はそれを受け取ると、奥の本棚にある膨大な傭兵資料の中から、数分ほどでリリィの資料を探し出す。その資料はWMSから取り寄せたのだろう。

傭兵は常にWMSへの定期的な報告と、仕事を請けた際の結果などの報告書を提出しなければならない。それを怠ると、傭兵登録を抹消される。

依頼人にはその傭兵、又は傭兵部隊の情報を知る権利があるということだ。

「では確認させていただきます。……はい、OKです。リアリスⅡホープ様、ランクEクラス、宜しいですね？」

「ええ」

リリィは返された証明書を背中に背負っているカバンの中にしまう。

傭兵になるのは簡単で、「World Mercenary Society」＜世界傭兵協会＞（通称「WMS」）で申し込んで講習を受講すれば、Hクラスと証明書がもらえる。

ランクは今まで収めた功績や、WMSのランクアップ試験に合格すると上がっていくが、ランクアップ試験ではEクラスまでしかもらえない。

Dクラス以上からは、戦果や経験に応じて昇格していくのだ。

ランクが上がると任される仕事の危険度は増すが、報酬も桁外れに上がっていく。

Hクラスの仕事は、平時ならば街の巡回の交代要員、戦争ならば前線から遠く離れた補給基地の守備という名目の雑用などしかない。

報酬も一仕事分で漸く一週間ぐらい何とか暮らせるか程度だ。

だがCクラスの仕事になれば報酬だけで一年は遊んで暮らせる仕事も選べるようになる。

勿論、その分危険度は高くなる。

WMSに登録されている傭兵全体の5%に満たないBクラス以上ならば、軍の極秘任務や特殊作戦に従事する事もあるのだ。

Bクラス以上の傭兵は歴戦の古兵、戦場のプロフェッショナルである証だ。

それ故に、受付の驚愕も当然の反応であろう。

受付は次にフーガの資料を、これも数分かけて探し出した。

「フーガ」ヒリュウ様、ランク、Bクラス……！」

途端、受付嬢の顔色が急激に変わった。

「し、失礼しました。宜しいでしょうか？」

「ああ」

受付の女性が信じられないという表情でフーガを見ているように、隣でリリイが驚愕の表情でフーガを見ていた。

「で、ではお二人方の仕事の内容ですが、まずリアリス様の場合ですと……」

「ああ、ちょっと待った」

フーガが受付の言葉を遮る。

「は、はい！ 何か!？」

哀れなほど動揺している受付に、フーガは視線でリリイを指して言った。

「俺の持ち場は彼女と一緒に頼む」

「え？」

「わ、わかりました。では、お二人方の仕事の内容ですが、此処から北東にあります都市トラディツオの東門の守備になります。

報酬および規約などの詳細はこちらに記してあります」

隣で茫然としているリリイを他所に、フーガはその紙を軽く一読した。

受付から渡された紙には、防衛の仕事の詳細と報酬の金額が書かれている。

「……問題ない」

「では契約成立ということで、こちらにサインをお願いします」

フーガとリリイは契約書にサインをして、受付を後にした。

「ねえ、なんでトラディツオなのかな？ 普通は戦場に送り出すか、首都に守りを固めない？」

トラディツオ行きの定期便飛空艇に乗り込んだ後、リリイはフーガに尋ねた。

フーガ達は休憩室に座っているが、廊下にいる人数だけでも結構な人数の傭兵が集まっているのがわかる。

「そうでもないぜ。トラディットオに守りを固めるっていうのはかなり効果があるんだ」

フーガはリリイに説明を始める。

「イルム帝国は北にある。東にはクラーク王国があり、西には天険のダッチベル山脈とレイス大海がある。

だから必然的に敵が攻めてくる方向は北になる訳だ」

「ふむふむ」

リリイは頷きながら聞いている。フーガは続ける。

「そしてユーラス国の北西にあるのがトラディットオだ。

ここに大軍を置いておけば、敵としては目の上のタンコブになるから無視できなくなる。

そのまま首都へ進撃すれば挟撃されるのがオチだからな。

それにこの都市は他国への街道も存在する、戦略的にも重要な拠点にもなるんだ。

だから敵はまずトラディットオを陥落させてから首都へ攻めてくる。

実際、前の戦争の時も敵はトラディットオを攻めた。だからトラディットオにできるだけの兵力を集めて置いたほうがいいんだ」

「なら、わざわざ都市に兵士を置かなくてもいいんじゃない？ 前回の戦いだって、相当な被害が出たって言うし……」

「実は、それが無理な話なんだ」

「どうして？」

「まあ、当たり前だがトラディットオより南に兵士を配置すると、敵はトラディットオを無血開城で手に入れる。

こんな馬鹿な配置をする奴はまずいないな。

そして実際問題、トラディットオより北に戦力を配置できればいいんだが、国境付近にあるイルム帝国領は丘陵地帯が連なっているんだ。

その南側は平野で、それはユーラス国にとって、守り難く、攻め難く、そして攻められ易い地形となっているんだ」

「なるほどね。どう足掻いても、トラディツオは戦場になってしま
う、と……」

「ああ。都市建設に携わった計画チームの顔を見てみたいもんだぜ。
平和な時なら栄えるのに絶好の場所だが、戦時には最悪の場所さ。

まさに“戦場の上に建つ都市”さ」

「へえ。というかフーガ、それどこで調べたの？」

「ここに来る前に暇なときにちよつと、な。事前になるべく情報を
得ていたほうが、後々いろいろと都合がいい時もあるから」

ふと、フーガはリリイの視線に気付いた。リリイはまじまじとフー
ガを見ていた。

「……なんだよ？」

フーガは目を背ける。昔から女性に見つめられると、顔を背けるク
セがフーガにはある。

「いや、流石はBクラスだなんて思ってたね。フーガって今いくつ？」

「……22だけど？」

「に、22！？ 私より3つ年上なだけじゃない！！」

思わず大声をあげたリリイに、何事かと周囲の視線が集まる。

それを自覚したリリイは、顔を赤くしつつ声を潜めた。

「普通、B、Cクラスのレベルの人達ってベテランのおっさんみた
いな人ばかりじゃない。受付の人驚いてたわよ」

フーガは黙っている。リリイはさらに追求する。

「あと、なんで私と同じ持ち場にしたの？ Bクラスの仕事だった
ら報酬なんかEクラスの何倍もあったのに……」

と、そこでリリイはフーガの目に気付いた。一瞬だけ、彼の瞳には、
少しだけ悲しみが見えたような気がした。

だがそれは一瞬だけだったので、気のせいだったのかもしれない。
フーガはゆっくりと言い出す。

「……まあ、昔な、いろいろあったんだ」

それだけだった。リリイも、それ以上の事は追求できなかった。

リリイに問われるより前に、フーガはそれを既に自問自答していた。

（何故、俺はリリイと同じ“戦場”にしたんだ？）

だが、答えがどうしても出ない。

あの時は無意識的に受付に答えていた。

別に地獄のような戦場が怖ろしいわけではない。

“北”での戦いでは常に激戦区に身を置いていたし、単身で特殊作戦を遂行したことだって何度もある。

戦場の恐怖など、慣れで抑えられるものだ。

（まさか、俺が彼女を心配したとでも……）

その考えを首を横に振って否定する。

たった二週間ぐらい行動を共にした程度で、情が移るほど自分は甘くはないはずだ。

ならば、何故……。

結局、答えは出ないまま、飛空艇はトラディツオに到着した。

第一章 第7話 〈Kamros II Ferri〉

「ま、待ってくれっ！」

「ウェンス、早くこっちに来い!!」

「急げ!! また砲弾が飛んでくるぞ！」

「ちくしょう、このままじゃ全滅しちゃう……」

「あきらめるな！ 援軍を要請すれば何とかなる！」

「こんな砲撃の嵐の中を誰が行くんだよ!!」

一步でもこの壕から出たらバラバラになっちまう！ アンゼルミ
たいに……」

「……」

「僕が行く」

「レッ!! 止せ、無理だ！」

「隊長は僕だ、やってやるさ。今までだって何とか生きてきたら
う？ ハル、暫くの間だけ皆を任せる」

この戦争で、仲間がもう二人も死んでしまった。

これ以上誰も死なせたくないかった。僕は仲間を助けるため、壕を飛
び出した。

前線に援軍を請う為に。援軍さえ来れば皆が助かる、そう信じて……。

僕が壕を出て十歩もしない時だった。運命の一弾が、壕の中へ吸い
込まれていった。

僕のすぐ後ろで爆発が起きた。身体ごと吹っ飛ばされたが、何とか
身体を起き上がらせる。

（くそ、早く行かないと!）

僕は前へ一步踏み出そうとして、足を止める。何故かは知らないが、
嫌な予感がした。

僕は、ゆつくりと後ろを振り返った。

其処には、助けるべき仲間がいるはずだった……。

「……あ」

其処には、誰もいなかった。“人のカタチ”をしたものすらなかった。

「あ、あ、あああ……」

砲弾が飛び交う中、僕は絶叫した……。

カルニアから飛空艇の巡航速度で約五時間、トラディツオの外に広がる原野に飛空艇は着陸した。

トラディツオに本格的な空軍基地は無い。大概は都市の外に広がる原野の一ヶ所に臨時の施設を設立するだけで済ませる。

飛空艇は平面な大地、または湖や港さえあれば着陸できるよう設計されている。

現在、民間で飛空艇を所有している企業は、ガラムル共和国の巨大複合企業ラズグランドを除いて他にいない。

よって民間の空港はガラムル共和国の首都ベラル以外に存在せず、全て国営、その殆どが空軍施設である。

夕暮れの中、フーガとリリィは自分達の配属先である東門に来ていた。

主な戦場となるのは、五階建ての建物も余裕で入るほどの大きさをもつ北門、或いは西門だろう。

だが、その二箇所よりも一回りも二回りも小さい東門からも敵は攻め込むかもしれない。

門の周りは広場になっており、その広場を囲うようにバリケード等

が設置されている。

白兵戦闘に支障は無いだろうが、航空戦力による攻撃を受けた際、逆に身を隠す所が無いのでひとたまりもないだろう。

また、門の外にも幾重もの塹壕が掘られている。

ここが、彼らの戦場となる。

「さて、そろそろ兵舎に行って休むとするか。敵は何時襲ってくるかわからないからな」

「ええ、そうね」

リリイも同意して、フーガ達は宛がわれた兵舎に向かって歩き出した。途端、

「よう、お二人さん。あんた等も此処の守備かい？」

と、すぐ後ろから声を掛けられ、二人は足を止めて振り向く。

そこには何時の間にかいたのだろうか、一人の男が立っていた。

長身で年の頃は二十代半ばと言ったところか、短く切られ立てられた青い髪と瞳。

紺色の鉄製の重式（軽式のように一部ではなく全身をカバーしている鎧）ながら軽量化と間接部の改良を加え、動き易さを兼ねた鎧。背中には彼の肩から膝元にまで匹敵する程の長さがある長剣を背負っている。

「そうだが、あんたも此処の守備に？」

「ああ、俺はカムロスⅡフェンリっていうんだ。宜しくな」

聞いてもいないのに自己紹介するカムロス。つられてフーガ達も自己紹介をする。

「フーガⅡヒリュウだ」

「私はリアリスⅡホープ。リリイでいいわよ」

「おう」

カムロスは陽気な声で応ずると、軽く周りを見渡して、少し引きつったような笑顔で言った。

「それにしても此処は守りにくいな。そう思わないか？」

その言葉に、フーガも苦笑を浮かべて同意する。

「確かにな。仮に敵戦空艇からの砲撃があれば、東門防衛どころか、内部の方にまで敵が侵攻してくるだろうな。」

まあ、そこらへんの戦術を考えるのは此処の指揮官であって、俺達じゃないさ」

雇われたフリーの傭兵達の場合、指揮権は現地の指揮官に委ねられる。

「違いねえ。傭兵は指揮官の命令に従って動けばいい、それだけさ。」

過去にもここでの攻防戦があったんだ。その時の教訓を踏まえてくれてる指揮官殿であることを祈るよ。

じゃないと、あの“難しい契約”に副えないからな」

カムロスが言っている“難しい契約”とは、契約書に書かれている次の事項のことだ。

「東地区に於ける今戦闘について、敵軍の侵攻を東門の外、最悪の場合でも東門前の広場にて防ぐ事。」

万が一、敵軍の東地区内部への侵攻が行われた場合、それを撃退せしめて成功契約金の半分を支払う。

現地司令官の判断で、撃退が不可能と判断され、作戦の失敗が確定した場合、当然の如く成功契約金は無いものとする。」

「ユーラス国は、十年前の再来を恐れているのさ。尤も、それはイルムも同じだろうけどな。」

でも、それを実際に阻止するのは現地の司令官じゃないのか……」

フーガの見解に、カムロスとリリイは苦笑しながら無言で頷いた。

「それにしても……」

カムロスは思い出したかのように独語して、フーガとリリイの方に向き直った。

「珍しいな」

そう言って、フーガとリリイを交互に見る。

「なにがだ？」

「なにがよ？」

声が重なった事に少しの驚きを覚えながら、フーガとリリイは怪訝そうにカムロスを見る。カムロスはニヤニヤしながら答える。

「いやなに、カップルで傭兵つてのが珍しいって事よ。職場結婚ってやつか？」

ずしゃあつ

これもまた、合わせたかのように二人は同時にこける。が、次の刹那、これも全く同時に起き上がりカムロスに迫った。

「違う！ 断じて違う！！ こいつは妻でも恋人でもないっ！！ 不名誉な！」

「そうよ！ この人は唯の金ズルよ！！」

「ふ、不名誉に、か、金ズルって……い、いや、何でも無い。す、すまない」

二人の気迫ある拒絶に思わず謝ってしまうカムロス。

（なんか、とんでもない奴等に声掛けちゃったな……）

カムロスの心の中で少し後悔の念が浮かんた。が、同時に、この二人がとても面白く見えた。

そしてそれは、ついさっきの後悔の念を消し去って、面白い奴らに出会えたと思うようになった。

（こういう男女がカップルとして、意外とうまくいくもんなんだけどな……）

この二人の行先を想像しながら、意地の悪い笑顔を内心でつくった。

「まあなんだ、折角知り合ったんだから、一緒に夕飯でも食いに行かないか？ そろそろ腹が減ってきたしよ」

カムロスは笑顔で、友人に話しかけるような口調で二人に話しかけ

た。空は日が既に落ちて、星が出始めていた。

「ああ、いいぜ。けど、その前に兵舎に行って登録だけでも済ませ
ておくか。飯はその後ってことでいいか？」

「オーケー」

「それでいいわ」

フーガの提案に賛同するリリィとカムロス。三人は兵舎に向かって
歩き出した。

第一章 第8話 〈Toraditsō〉

フーガ達がトラディツオに着いてから三日が経った。

未だ敵の襲撃は無いが、東門司令部は首都からどんどん送られてくる傭兵の分配や敵情報の分析などで多忙していた。

尤も、東門に配置される傭兵は、フーガを除いてGからEクラスの傭兵しかない。

Dクラス以上の傭兵や傭兵部隊は、専ら主戦場になると予想される北門か西門に配置されている。

昨日、フーガ達は東門方面軍司令官を初めて見た。

名前などは守備隊の兵舎で既に知っていた。ガーリング中佐、28歳という若き秀才だ。

その経歴を見て驚いた事に、彼には実戦経験が無い。陸軍士官学校を首席で卒業したエリートだという話だ。

因みに、ユーラス軍の精鋭が集められたユーラス第二軍が中核を成している北門方面軍の司令官はランザードⅡブラウン大将。

ランザード大将はユーラス軍随一の名将と呼び声高く、部下からの信頼も厚い将校だ。

またユーラス第三軍と傭兵で構成された西門方面軍の司令官はラツト中将。

応用性が高く柔軟な思考の持ち主らしく、傭兵と正規軍が混同している西門方面軍を見事に纏め上げている。

そして、この二人は10年前のトラディツオ攻防戦を生き抜いたベテラン将校だ。

だが低ランクの傭兵と、正規軍だが若い新兵達で編成されている新設の第一九中隊の司令官ガーリング中佐。

訓練学校から急遽駆り出された訓練生で編成された、同じく新設の第三八中隊の司令官レーダー中佐。

この二人は実戦経験などないらしい。二人ともまだ二十代であり、10年前はカルニアの陸軍士官学校にいたからだ。

今日、ガーリング中佐は兵舎の前の校庭で中隊を一同に集めて訓示をした。

前に立つ中佐の姿は、フーガから見れば酷く頼りなく思えた。

「諸君、もうすぐ愚かなイルム軍がこのトラディツオに攻めてくる。だが、栄えある我がユーラス軍と勇敢な君達、傭兵によってそれらは駆逐されるだろう！」

本官は諸君等の健闘を心から信頼し――」

在り来たりで感動も感銘も何も無かった訓示を終えて、各自はそれぞれの配置に着いた。

フーガ、リリイは東門の外を、カムロスは東門の中にそれぞれ配置されている。

東門の外は近くの森以外は一面平原で、塹壕を掘るのに苦労は要しなかった。

塹壕の前面には木造の柵が幾重にも隙間なく並べられており、尖らせた木の先端を外側に向けている。

この柵が役に立つことはあまりない。

一昔前ならば相手は突破に苦労しただろうが、弾頭着発信管の開発を契機に技術的革新を遂げた近代砲の火力の前に、間違いなく粉碎される事だろう。

ふと、周りの視線が自分とリリイに注がれているのをフーガは感じた。

理由は3日前、カムロスと共に食堂へ行った時の出来事だった……。

フーガとカムロスはユーラス軍の食堂名物、特性カレーを食べたが、

リリイは“食堂珍物”、『撃滅パスタ』などという物騒な名前のパスタを食べた。

それを美味しそうに食べるリリイ。あの時から自分達に視線が集まっていたのを知っていたが、問題はその後であった……。

「あなた達も食べてみる？」

人の好奇心とは、恐ろしいものだ。禁断の果実を食べてしまったのも、パンドラの箱を開けてしまったのも、その好奇心からだ。

そして、フーガとカムロスは地獄に落ちた。

あの殺人パスタを食べた途端、フーガはその場で気を失った。おそらく、本能が味覚を感じるのを拒否したのだろう。

カムロスは訳の分からぬ悲鳴を上げながら飛び出していき、井戸の手前で倒れていた。井戸の水を飲む前に力尽きたと思われる。

二人が医務室で目を覚ましたのは、翌日の昼であった。二人共、口の周りがやけに腫れ上がっていた。

……あとで聞いた話だが、リリイはあの激辛の“撃滅パスタ”に、更にタバスコをたっぷり混ぜていたらしい。

ともあれ、この事が原因で三人は、特にリリイは第一九中隊の中で、不本意ながら一躍有名になった……。

東門のすぐそばの野原に腰掛けているフーガとリリイ。

「リリイ、今回の戦いは前線の判断で動くことになるかもしれないぜ」

「え？」

突然、フーガがリリイに言った。

「また見切りってやつ？」

リリイの問いにフーガは少し微笑を漏らすだけであった。ちなみに

口の腫れは一晚寝たら治っていた。

「実戦経験が全く無い奴が司令官ときた。戦場で常に冷静になるには経験しかない。」

まあ、せめて学校と戦場は違うって事がわかっていればいいんだがな……」

フーガ達にとって唯一幸運だったのは、東門方面軍の中核である第一九中隊の指揮官がハウゼル大尉という老練なベテランであることだろう。

実は、この司令官と指揮官も配置には秘密があるのだが、それをフーガ達が知る由も無かった。

ハウゼルは既にベテランの域だが、よく軍の上層部に楯突いているのでなかなか昇進しないらしい。

当の本人は「万年大尉さ」といって気にしていないようだが……。

そしてその日、城壁の陰で休んでいたフーガとリリイの下へ、そのハウゼル大尉がたった一人でやってきた。

「君がフーガⅡヒリュウ君かね？」

突然、指揮官に話しかけられてフーガは驚いた。

「ええ、俺がそうですけど、なにか？」

と、内心で驚きながらも表情には出さず、平静さを保ちながら答える。意味はない、ただの意地だ。

ちなみに、隣のリリイは驚きの表情を隠そうとしなかった。

「君の事は聞いているよ。何でも、その若さでBクラスなんだって？　なかなかの腕じゃないか」

ハウゼルは笑いながらフーガの肩に手をぽんっと置く。

「はあ、そうですか」

フーガは曖昧に答えつつ、ハウゼルが自分に何の用なのかと怪訝に思った。

少なくとも、ただ単に話しかけてきただけではなさそうだ。

それをハウゼルは悟って、言った。

「何、若干22歳でBクラスになった傭兵がいると聞いたものでな、ちょっとした好奇心から、君と話をしてみたいと思ってね」
そして、リリィに気付かれないようにフーガへ目配せをする。

「君が良ければ、君の武勇伝を聞いてみたいのだが、どうかな？」

「……いいですよ。少し散歩もしたいと思っていたところですので、歩きながらで宜しければ」

「結構だよ。お嬢さん、彼を少し借りていくよ」

「えっ？ あ、はい、どうぞ……」

驚きと急な展開に話についていけなかったリリィは思わずそう答えてしまい、二人が彼女に背を向けて歩き始めたのを見て、激しく後悔した。

「――それで、俺に何をさせたいのですか？」

周りに誰もいないことを気配と視線で確認して、フーガは口を開いた。

「やはり、わかっていたか。流石はBクラスだ」

「あからさまな目配せに、やや強引な会話の流れ。鋭い人間なら誰だって気付きますよ」

それは裏を返せばリリィが鈍感だと言っているのだが、彼女の場合は突然の出来事に理解が追いついていなかったせいである。

尤も、高ランクの傭兵ならば突発的な出来事にも即座に対処できる。それがリリィとフーガの差を表している。

「話の半分は本当だよ。二十代前半でBランク、そんな傭兵は滅多、いや百年の歴史でも若干名しかいない。君は一体、何をしたのかね？」

純粹な好奇心と相手を見定める意思が混ざった口調で、未来の英雄候補、いや自分の与り知らぬところで既に英雄かもしれない若き男に尋ねる。

「ただ戦い続けただけです。……北大陸でね」

対するフーガの言葉は飾り気も何もない事実のみを言った台詞であったが、ハウゼルにはそれで充分だったようだ。

「そうか、君は北大陸の出身か。それなら戦果を掴むチャンスは幾らでもあっただろう。あそこでは紛争には困らないという話だ」

「出身は東大陸です。北大陸には4年間ほど傭兵部隊にいました」

「成る程。私はあの大陸へ行ったことはないが、あそこでは多くの英雄が生まれている。

『カタストロフィ』のゼロ。

『フェイス』のネルソン。

『スペリオル』のレイ。

『ライトニング』の“ダブルス”。

『ブレイザー』のザナフ。

フリーの傭兵ではブライドやウエンなど。

何れも北大陸で戦い、世界に名を馳せた傭兵達だ。尤も、その千倍の傭兵が志半ばに倒れていくみたいだが」

そこでハウゼルは横に並ぶフーガへと振り返る。

フーガも只ならぬ事だと悟り、真剣な顔になる。

「もし戦いが起こったら、私の身とて安全ではない。場合によっては指揮が取れない状態に陥ることもある」

その言葉の意味を、フーガも理解していた。指揮が取れない状態、それはハウゼルが戦死することを遠まわしに語っていた。

（まさか、護衛してくれて、そんな冗談は言わないよな？）

だが、続けて言ったハウゼルの一言に、フーガは絶句する。

「そこで、私が指揮を取れない状態に陥った場合、君が副官をサポートしてくれないか？」

「！！」

「既に副官や幕僚たちの承諾は得ているよ。後は私が実際に君を見た際の判断と、君の承諾次第だ」

流石のフーガも、この事態は予想だにしていなかった。ハウゼルは続ける。

「副官といっても実戦経験はゼロだ。そして幕僚達も。なにせ前のイルムとの戦いで多くの人が死んだ。

将校も沢山亡くなった。経験のある将校の数が圧倒的に足りないんだ」

「10年前のトラディツオ攻防戦ですか？」

ハウゼルは頷く。フーガもその戦争の内容は大体知っていた。

今から10年前、テラス暦1079年に起きたユーラス、イルム両国の過去最大の戦い、『トラディツオ攻防戦』である。

都市トラディツオは、ユーラス国建国から都市としては初めて、国家挙げての一大事業で建設された大都市だ。

四方を城壁で隔て、東西南北の門からそれぞれの国へ街道が続いている。

北門はハイベル連邦共和国へ、西門はイルム帝国へ、東門はクラーク王国へ、南門はユーラス国首都カルニアへ。

イルムとユーラスが開戦した当初、この都市にまで戦火は及ばなかった。

各国の商人が住み込みで商売しているこの都市を攻撃することは、ハイベルとクラークに宣戦布告の機会を与えてしまう。

当初、イルム帝国はそう考えていた。

だが、彼らはふと思った。どちらにしろ、ハイベルとクラークは何かと理由をつけて遅かれ早かれ宣戦布告してくる。

イルムは現在、ユーラスとの長き戦争で弱りきっている。それを両国が見逃すはずがない。

ならば先手必勝で、トラディツオを攻略してしまえ。ここを押さえれば、三国の喉元にナイフを突きつけたも同然ではないか。

今なら防御は手薄だ。やるならば、今しかない――！

そして、帝国の命運を賭けて、イルム軍はトラディツオに電撃侵攻を開始した。

トラディツオにイルム軍多数接近！ この情報はユーラス軍を驚愕させた。

いや、ユーラスだけでなくハイベル連邦もクラーク王国もこの情報に驚愕した。

これはしてやられた。まさか、イルム軍がトラディツオに攻撃してくるとは、奴ら血迷ったか！

とにかく、ユーラス国はイルム帝国に完全に出し抜かれた結果となった。

急ぎ国境付近に展開させていた主力軍をトラディツオへ向かわせたが、

彼らが到着した時には、トラディツオの三分の二が既に占領されていた。

トラディツオ守備隊は果敢に戦ったが、多勢に無勢、壊滅状態に陥り各所で寸断、包囲殲滅の危機に瀕していた。

そして、悲惨な戦場が生まれた。

戦局を左右する攻防戦である。両軍とも死力を尽くして戦った。

司令部を包囲され孤立無援に陥っても、最後までその司令部を死守した。

弾薬が尽きても白兵戦を展開して戦った。イルム軍は狂気の末に毒ガスまで用いた。

結果、この都市はユーラスが守り抜いたもの、両国の損害は凄まじかった。

トラディツオは都市としての機能を完全に破壊され、何万という両国の将兵や逃げ遅れた一般市民の無残な死体があちこちに散らばっていたという。

あれから10年が経ったが、今だユーラス軍の傷は癒えていない。イルム軍も多数の将校を失ったが、それ以上にユーラス軍は多くの将校、指揮官を失った。

主な理由は二つある。一つはユーラス軍が勇敢すぎた事が言える。士気鼓舞の為に司令官自らが戦場に赴いて指揮を取ったり、撤退時には自ら殿軍となり、彼等は常に最後まで戦っていた。

戦場に長く居るだけ、銃弾や砲弾の危機に晒されたわけである。

そしてもう一つの理由、それは当時のイルム帝国総司令官であったグラマン元帥の作戦であった。

彼の基本戦略は、「指揮中枢を破壊する」ことであった。

両軍の間に市街地戦が起きると、彼は戦場の混乱に乗じて特別に訓練した特殊部隊を敵軍に紛れ込ませ、司令部の位置を探らせた。

司令部の位置が掴めると、グラマンは夜襲、奇襲、更には強襲で司令部を次々に潰していった。

ユーラス側の被害は大きく、時にはトラディツォ方面軍司令部壊滅という事態まで起き、軍の統括すら危うい状況になった事もある。この作戦によって、多くの将校が戦死した。

この事態を重く見たユーラス軍部だが、何故敵軍に司令部の位置が知られるのか結局わからず、

遂に対応策を見出せずに苦肉の策として、3個中隊を司令部の守備に就かせ、被害を食い止めようとした。

しかし、ただでさえ兵力不足に悩んでいる中、3個中隊という貴重な戦力を削がれた各地前線が危機に陥ったのは言うまでも無い。

将校の被害は何とか食い止めたが、今度は前線の被害が増大した。

「私はあの戦場で運よく生き延びる事ができたが、今回も運よく生き残れるかわからん。

もしもの時に、安心して任せられる者が生憎と私の周りにいないてな」

「他に士官はいないのでですか？」

「そういった連中は皆、北門か西門に取られたよ。東門と南門は量も質も、申し訳程度の戦力しかない。

現に東門方面軍司令部を見てみたまえ。初陣の佐官が司令官だ。

司令部の幕僚も若いのしかない」

「確かに」

「そこで、Bクラスである君に頼みに来たのだ。砲煙弾雨を潜り抜けた者が傍にいれば、新任達の動揺もすぐに収まるだろう。」

新任達も士官学校では優秀な連中だ。何とか抑えることはできるだろうと、私は踏んでいる」

傭兵ランクDクラスの傭兵は、練度の高い兵士と同等とされている。

Cクラスの場合は歴戦の下士官と同等、つまり戦闘も状況判断もこなせる、優秀な戦士であるということだ。

そして、Bクラスともなれば部隊の指揮官、特殊部隊の隊長も務まるだろうと言われている。

無論、戦士としても優秀であることは前提だ。

「……ところで、実際に俺を見て判断するのではなかったのですか？」

「判断したからこそ、こうやって話しているのだよ。それで、お願いできないか？」

ハウゼルはフーガに頭を下げた。

“命令”ではなく“お願い”。つまり司令部に内密で、ハウゼルと幕僚達の一存で頼んでいるということだろう。

指揮官に頭を下げられては、流石に嫌とは言えなかった。

「わかりました。出番が無いこと祈りつつ、引き受けますよ」

「そうか、すまないね。——ありがとう」

そうして、フーガは内密にハウゼルの副官補佐になった。

ハウゼルは早速フーガを副官と会わせる為、東門から少しだけ離れている一階建ての建物にフーガを連れて行った。

どうやらそこが指揮所らしい。

中に入ると、皆が慌しく動いていた。

地図に見入っている者や、首都から送られてくる兵の配置を検

討している者など様々だが、よく見るとその全員が若い。

到底、戦争など経験した事が無いような連中だと直ぐにわかった。

「ライハント、来てくれ」

ハウゼルが呼ぶと、一人の若い男性が駆け寄って来た。

その男は中尉の勲章を付けていたが、見た目はとても軍人とは思えず、どちらかと言うと学生のように見える。

「紹介しよう。彼はライハント少尉、私の副官だ」

ハウゼルが紹介すると、ライハントと呼ばれた男性は緊張した表情でこちらに敬礼をした。

「じ、自分がハウゼル大尉指揮官の副官、ライハント少尉であります。此度は自分などの若輩者の補佐をして頂けるとの事で、恐縮であります！」

「フーガ」ヒリュウだ。俺の出番なんて来ないと思うが、万が一の時は宜しく頼む」

「は、ハイッ！」

ライハントは一通りの挨拶を済ませると、そそくさと奥へ向かって行ってしまった。

「頼りないだろう？」

「……ええ、そうですね」

フーガは何故ハウゼルが自分にわざわざ補佐を依頼したのかわかった気がした。

ちなみに、リリイが未だ城壁の傍で待っている事をフーガはすっかり忘れていた。

その晩、フーガはリリイの機嫌直しに終始しなければならなかったという。

世界情勢【ウエスト大陸】

● 大国

- ・ ガラムル共和国（大陸北東地方）
- ・ イスパニア王国（大陸東部地方）
- ・ エルトラウト帝国（大陸北部地方）
- ・ パスカーナ王国（大陸南部地方）
- ・ ユーラス国（大陸西部地方）
- ・ イルム帝国（大陸西部地方）

● 各地方の情勢

・ 大陸北東地方

ノース大陸との交流が最も盛んな地方。

北東地方にある五ヶ国の内、巨大複合企業ラーズグランド社、Sラ
ンクの傭兵部隊カタストロフィを抱えるガラムル共和国が突出した
勢力を誇る。

他の四ヶ国は形式上独立国家であるが、経済援助、技術支援などを
ガラムル共和国に依存している為、

ガラムル共和国に対する発言力は極めて低く、実質上は衛星国とも
呼べなくもない。

ガラムル共和国はラーズグランド社の高い技術力を都市に流用して
いる為、

ラグナバル機関を使用した電力の供給、水道の完全設備、蒸気機関
車の運用など、国民の生活水準は世界で最も高い。

ガラムル共和国の陸軍は10個軍団、総兵力およそ11万人。航空戦力は大国の中でも屈指の45隻。海軍は12隻の鋼鉄艦を保有している。

100隻近い航空戦力を保有する世界最強の傭兵部隊カタストロフィの本部がある事でも有名。

・大陸東部

東部地方の六ヶ国中、無敵艦隊と呼ばれる程の海軍力を誇るイスパニア王国が覇権国家。

イスパニア王国はテラス暦1082年のドレーク沖海戦で勝利を収め、大陸東部の海洋の制海権を獲得。

海洋貿易を主体に高い経済力を持ち、38隻の鋼鉄艦を持つ海軍が制海権を堅持している。

反面、飛空艇に関するノウハウは低く、航空戦力はニルビム級戦空艇が10隻のみ。

陸軍は6個軍団、総兵力およそ6万5000人だが、装備の面では旧式化が否めない。

また、12隻の鋼鉄艦、20隻の木造船を保有するAランクの傭兵部隊シーファングの本部があり、

大陸東部地方の商船護衛、特にノース大陸への航行は主にシーファングが護衛を請け負っている。

イスパニア王国は東部海岸に接する港を、他国の港も租借という形で全て抑えている為、他の五ヶ国から反感を買っており、緊張状態が長らく続いている。

現在でも国境線での威嚇行動や、外交での駆け引きが頻繁に行われている。

・大陸北部

北部地方の四ヶ国の内、強大な軍事力を誇る“北方の雄”エルトラウト帝国が覇権を握っている。

他の三ヶ国はエルトラウト帝国の衛星国で、完全な傀儡政権である。世界屈指の兵力動員数を誇る陸軍を主体に、軍事力をもって覇権の座を担っている。

エルトラウト帝国もその事を認識しており、装備、人材育成にはかなりの力を注いでいる。

陸軍の総兵力は18個軍団、約20万人の動員数を誇り、装備の水準も高い。

港が無い為、海軍力は皆無であるが、空軍力は25隻の戦空艇を保有している。

近年、更なる領土拡大を画策しており、西部地方、南部地方の情報収集、諜報を活発に行っている。

・大陸南部

温暖な気候の為か、現在世界で最も平穏な地方と呼ばれている。

小国が乱立しているが、パスカーナ王国を中心に友好関係を結び、地方では戦争の緊張状態とは無縁である。

近年はエルトラウト帝国の工作員の存在が目立つようになり、北部に対する警戒を強めている。

尤も、パスカーナ王国を含めた南部連合の国力はエルトラウトに断然劣っている。

南部連合の陸軍の総兵力は6個軍団、約7万人。

航空戦力はパスカーナ王国のニルビム級が6隻のみ。海軍に至っては未だ木造船が主流である。

豊かな土地柄な為、他地方から盗賊などが流れ来て不法を働き、よって傭兵の活躍の場は意外と多い。

・大陸西部

西部地方の四ヶ国の内、大国であるユーラス国とイルム帝国が覇権を巡って、長らく戦争を行っている。

イルム帝国はテラス暦1006年に勃発した解放戦争の英雄、イルムIIアルバーゼが建国した国であり、

豊穡な土地、良好な港、交通の利便さを兼ね備え、長らく西部地方の覇権国家であった。

一方のユーラス国は、イルム帝国の南方に存在した小国五ヶ国が合併した新興国家で、イルム帝国に次ぐ国力を持つ。

テラス暦1073年のラクリア事件によって両国の関係は一気に悪化。

翌年1074年に国境沿いでの武力衝突を契機に、イルム帝国とユーラス国は戦争状態へ突入する。

イルム帝国はユーラス国だけでなく、他二ヶ国とも緊張状態にあり、両国の戦争は決着が着かず、

テラス暦1079年のトラディツォ攻防戦以後、膠着状態のまま武力衝突は起こっていない。

イルム軍の陸軍は総兵力8個軍団、およそ10万人。航空戦力は28隻、海軍は15隻の鋼鉄艦を保有している。

ユーラス軍の陸軍は総兵力6個軍団、およそ6万5000人。航空戦力は22隻、10隻の鋼鉄艦を保有している。

装備は互いに戦争の負担が大きく、装備の最新化が思うように進まず新旧混合の状態である。

世界情勢【ウエスト大陸】（後書き）

いずれ機を見てはノース大陸編、イースト大陸編の世界情勢も投稿したいと思います。

第一章 第9話 く戦場の上に建つ都市く

「陛下、既に勝敗は決しました。これ以上は無意味です、余計に犠牲者が増えるだけです。」

既に評議会も、降伏勧告を採択しました」

「……だが、敵に屈すれば、この国は滅び、そして後に待っているのは貧困に喘ぐ国民達だ。」

それだけは、何としても避けたいのだ」

「陛下!!! しかしこのままでは……」

「私は、この国が好きなのだ。世界に誇れる歴史があり、人々は常に礼を重んじる。この国が滅ぶなど……。」

何故、この国が滅ぶ? 我々が何をしたというのだ? 我々は平穏に暮らしていただけだ!!!」

なのに、何故滅ばなくてはならないのだ……」

「陛下……」

「わかっておる。これ以上、国民を死なせる訳には行かない。」

国民あつての国家、国よりも若者の、人の命だ。わかつている……」

陛下と呼ばれた男は、ゆっくりと窓へ向かう。外には雨が降っていた。彼は側近に問う。

「この世界には、欲望と絶望しかないのだろうか……?」

その日、一つの国が滅び、世界中に衝撃が走った。

フーガがライハントと対面した翌日の朝、快晴のこの日、北門から北方に敵来襲の報が届いた。

そして、全軍に第一級臨戦態勢の命令が下された。

「いよいよね」

北門の方から銃声や砲撃音が聞こえてくる中、リリイがやや緊張した声色で言う。

話によると今までは要人の警護や城の警備などの仕事ばかりしていて、戦場に出るのは初めてらしい。

ついでにカムロスは戦争は今回が二度目と言っていたが、本格的な戦闘は経験したことが無いとも言っていた。

要するに二人とも、“戦場”を経験した事ないということだ。

「ああ」

フーガも低い声で返しながら、周囲を警戒する。

東門の外は、南の深い森以外は見通しの良い草原や荒野地帯で、石で造られた街道が真っ直ぐと東のクラーク王国へ向かって延びている。

今のところ、敵はまだ来ていない。

敵がこの東門に攻めてくるかわからない。若しかしたら、北門と西門に兵力を集中させて攻め入ることも考えられる。

「戦闘開始直後の主導権は攻撃側にある」と、古今東西全ての兵法書には書いてあるが、正にその通りだ。

攻撃側は何時でも、何処からでも兵力を集中して攻め込む事が出来る。

逆に防御側は全ての防衛線に等しく兵力を振り分けねばならず、常に受け身にならざるを得ないのである。

尤も、このトラディツオでは東門と南門は狭くて小さく、北門と西門の広さの足元にも及ばない。

大勢の兵を投入できる場所が限られている分、此処はまだマシと言った所だろう。

「敵来襲！」

東門の上にいる見張りが叫ぶ。周りにいる兵士や傭兵達は一斉に身構える。無論、フーガ達も身構えた。

「こっちにも、お客さんがおいでなすったようだな」

声色は平常のまま、静かにフーガが言った。

「ええ、この通行料金は高いわよ。……って、あれ？」

緊張を紛らわせるための冗談が途中で止まり、リリイが前を見ながら疑問の声を上げる。

地平線の彼方から攻めて来ているのは、リボルバー銃と剣を装備した歩兵でも、マツチロツク銃やマスケツト銃を抱えた銃撃兵でも、馬に跨り長槍を構えた騎兵でも、野砲を引っ張ってきている砲撃兵でもなかった。

“それ”は、空に浮いていた。

この世界に於いて、空を飛ぶ乗り物は一つしかない。

建造費や維持費など、経済的に負担の大きいその乗り物は、大国と呼ばれる国家しか所有していない。

例外は東大陸のジパン皇国、カタストロフィ、ファイスの傭兵部隊、そしてラーズグランド社ぐらいであろう。

イルム帝国とユーラス国は、数少ない“大国”の中の一つである。

しかし大国といえども、全て合わせてそれを50隻以上所有しているのはガラムル共和国、傭兵部隊ファイス、傭兵部隊カタストロフィのみである。

航空戦力は非常に貴重である。それは存在するだけで既に強力な意味を持つ。

エアフリード・イン・ビーイング
飛空艇現存戦略と呼ばれる戦略が成り立つほどだ。

まさか、“それ”を主戦場ですら無いこの東門に投入してくると、ユーラス軍の誰が考えただろうか……。

その姿がハッキリと確認できた時、周りの兵士や傭兵達はうろたえ

始めたが、フーガやハウゼルといった極僅かな例外もいた。

フーガにとって“あれ”と敵対するのは初めてではない。その歴戦の経験もまた、Bクラス所以の実力だろう。

フーガがリリイと同じ仕事にした事が、ここで幸いした。

「その伝令ッ！ 急いで指揮所に連絡しろっ！ 敵軍の飛空艇が8隻接近！！ うち戦空艇は5隻、輸送艇が3隻、だ！」

周りの兵と同じく動揺していた伝令は、フーガの言葉を聞いて我に返り、すぐさま指揮所へと走り去っていった。

司令所ならば長短式電信^{トシツキ}もあるが、戦場では昔も今も、基本的な連絡手段として伝令は重要な役割を果たしている。

「輸送艇って事は、空挺部隊か」

フーガは敵の作戦の意図を瞬時に理解した。

戦空艇と空挺部隊の連携した波状攻撃。

空軍の基本戦術の一つだ。

敵は東門守備隊を戦空艇の砲撃で壊滅させた後、空挺部隊の降下作戦で東門を占領するつもりなのだろう。

「そんなことされたら、報酬が減っちゃうんだがな……」

フーガは小さく呟いた。その表情には不安も恐怖もない。

寧ろ、楽しんでるようにすら見えたが、本当はどうなのか、フーガ自身すら気付いていないだろう。

「な、なんで戦空艇が此処にいるんだよ！？ 北門で主力戦空隊と撃ち合ってるはずだろ？」

「ま、まさか北門にいた我が軍の戦空隊が全滅したのか！？ そんなバカなッ！！」

味方から次々に上がる叫び、いや悲鳴が上がる。大半が輸送艇だと気づいていないようだ。

彼等の動揺も納得できる。たとえ戦空艇3隻でも、少しの時間さえあれば野砲だけしか所持していない東門守備隊を壊滅させる事は容易だ。

更に言えば、携帯性を重視している野砲では飛空艇に当てる事は困

難だ。

飛空艇を撃墜できるのは威力を重視した大砲級か、飛空艇迎撃用の対空砲か、同じ飛空艇か、である。

この中で、三番目が最も効果的なのは言うまでも無い。

「陸軍、海軍は空軍には弱い」、これは世界の常識であり事実であった。

この常識を覆す戦いが東大陸で起きるのは、これから暫く先のことである……。

実は北門では両国の主力戦空隊同士の艇隊戦が現在も行われていて、東門にきた空艇は別働隊であったが、彼らがそのことを知る由もない。

そして、空飛ぶ船が火を放ち、雷鳴に似た轟音が辺りに轟く。敵戦空艇の砲撃が始まったのだ。

5隻の戦空艇から放たれた20前後の砲弾に、位置エネルギーとそれに伴う重力によって生じた運動エネルギーが加わって地面へと着弾する。

直後、弾頭に設置されている着発信管に地面と衝突した際の強烈な衝撃が加わり、それが信号となって中の炸薬を点火させ、砲弾を爆発させる。

結果、着弾した周辺に火炎と爆風、破片をばら撒き、そして大量の土砂を抉り降らせる。

設置された木の柵など役目を果たす前に砲撃を受けて粉々に砕け、塹壕も土砂によって少しずつ埋められていく

空からの攻撃では此方は無防備であった。東門には大砲も対空砲も置いていない為、攻撃の手段も皆無だ。

次々に降ってくる砲弾の雨に味方は戦う前から潰走寸前であった。だが、そこへ指揮官ハウゼルの怒号の指示が一带に響く。

「落ち着け！！ 間も無く味方戦空艇が到着する。それまで死にたくなければ塹壕に避難しろ！」

ハウゼルの声に反応した兵士達が、我先にと塹壕に飛び込んでいった。

いや、砲撃音にも爆発音にも劣らない怒号とは……。

「さすがはベテラン指揮官、なかなかの蛮声だ」

フーガが褒め言葉なのか分からないセリフを吐きながら、フーガとリリイは塹壕へ滑り込んだ。

その直後、さっきまでフーガ達がいた場所で砲弾が炸裂した。

あと数秒でも遅かったのなら、二人の人生はここで強制的に終わりを迎えていただろう。

戦場では運が生死を分ける。熟練兵は素早い動きにより、より生き残れる確立が高い状況へと自分を持っていけるものだ。

それができないものが、生き残れない確立の高い状況に留まってしまい、死を迎える。

フーガは敵のいる空を見上げた。土砂が目に入らないように手をかざす。

敵は城壁外だけではなく、城壁内にも砲弾を撃ち込んでいるようだ。

「カムロスは無事かな？ フーガ」

リリイが不安な色を表情と声に込めてフーガに尋ねる。

「さあな、俺達はカムロスの実力なんて知らないし、無事なら結構、そうじゃないなら仇を討つまでさ」

それにフーガは平常と変わらない声で答える。

この三日間、フーガとリリイは意気投合したカムロスとよく行動を共にしていたが、カムロスの配置が城壁内の広場の為、此処からでは無事を確認できなかった。

直後、至近弾が爆ぜてフーガ達に土砂が降り注ぐ。

「こんな簡単な塹壕じゃ、何時までも耐えられないわよ！」

リリイは悲鳴に近い叫び声をあげた。

彼女の言うとおり、簡単に造られた塹壕は戦空艇の砲撃によって削られたり、埋もれ始めている。

それにフーガは、頭に付いた土を軽く払いながら答えた。

「仕方ないさ。まさか敵が東門なんかには戦空艇を出してくるとは夢にすら思わなかったんだからな。」

まあ、全滅する前に早く味方が来てくれる事を祈るか。リリイ、味方っぽい飛空艇が見えたら教えてくれ」

フーガは素っ気無く言うのと、塹壕の堀に背をもたれて目を瞑った。
――寝ようとしているのだ。リリイはそれを啞然として見つめる。

（なんでこんな状況でもふざけていられるのよ!? Bクラスの傭兵って初めて見たけど、何時もこんなに冷静なの?）

次の瞬間には死んでしまうかもしれないこの状況で、異常なまでに冷静なフーガに、少し畏怖を感じた。

だが、フーガは知っているだけだ。この状況で何が出来るというのか?

所詮一兵士でしかない自分では、この状況下では何も出来ないのだ。

それから何十分が経過しただろうか。

塹壕とその周りは砲撃によって削られ、掘り返され、最早塹壕としての機能を果たさなくなりつつあり、塹壕内に避難していた味方に被害が始めた。

フーガ達の近くに砲撃が着弾し、吹き飛んだ土を頭からかぶった。

（もうそろそろ限界だな……）

フーガは目を開いた。隣でリリイが頭を叩いて土を落としている。彼女も少しは冷静さを取り戻したようだ。いや、ただ単に開き直っただけかもしれないが。

その時、敵戦空艇が突然砲撃を止めて急旋回した。敵艇が急旋回した方向の遙か上空に、戦空艇数隻の姿がある。

それはユーラス軍の戦空艇だ。如何やら上空から奇襲をしようと思っていたのを発見されたようだった。

敵戦空艇はどんどん上昇していく。ユーラス戦空艇隊は敵戦空艇に砲撃を開始する。

敵も撃ち返し始め、地上への砲撃は止んだが、今度は空で砲撃戦が開始された。

「た、助かったみたいね……」

リリィが呟く。

「にしても、援軍が随分と遅かったな。まさか伝令が道を間違えたのか？」

フーガは冗談と混ぜながら軽く悪態を吐いた。

実際はガーリング中佐ら司令部の首脳陣が飛空艇襲撃の報告に激しく動揺し、援軍要請が遅れたせいであるのだが、それをフーガ達が知る由も無かった。

その際、気の利いた下士官の一人がカルニア総司令部へ通信を送り、航空戦力の要請を行ったおかげで、東門方面軍が一方的な全滅を免れたという事も、

フーガ達は知る由も無かった。

味方艇は敵艇に砲撃を開始した。

敵艇による地上砲撃は、“今のところ”はもう心配なさそうであった。

戦空艇同士の砲撃戦中、イルム軍の輸送艇から多数の人影が飛び出し、パラシュートを開いた。

「あれは、空挺部隊か!？」

空挺部隊を下し終えると、3隻の輸送艇は針路を北に取り、戦場から離脱していった。

敵は東門から少し離れた場所に着地、集結している。

本来ならば空挺部隊は敵陣の後方に着地して攪乱するものだが、今回は主戦力がない為、どうやらこちらのど真ん中に着地することを避けたようだ。

「各員、戦闘準備!!」

ハウゼルの号令で、地上でも戦いが始まる。

空、陸と東門の戦いの火蓋が切って落とされた。

第一章 第10話 〈空中戦〉

ユーラス軍戦空艇はニムビル級戦空艇8隻の第五戦空隊である。

ニムビル級は主砲が前後に2門ずつの計4門、両舷に副砲が4門ずつの計8門、合計12門の砲門を装備している。

火力、装甲が弱いという欠点があるが運動性能が良く、偵察や輸送護衛、国境警備など多目的に利用でき、

なにより他の飛空艇と比較して低コストで建造できることが特徴だ。

よってニムビル級は世界中の空軍で多目的用に建造、使用されている。無論、ユーラス国も例外ではない。

一方、イルム軍の飛空艇も8隻だが、戦空艇はメアル級5隻の新規急設されたイルム軍第六戦空隊のみで、

残り3隻は空挺部隊を運ぶ輸送艇である。

その輸送艇も多数の空挺部隊を投入した後、北に退却して行った。

メアル級はまだ公式市場には出回っていないラーズグランド社の試験艇である。

ニムビル級の改裝型で従来の運動性はニムビル級に劣るものの、主砲が艇首に3門、艇尾に2門、副砲が両舷に5門ずつと火力を強化。

連射速度も、砲弾装填を今までの手作業から油圧式機械を導入して半自動化させた事により格段に向上。

装甲も新たに開発された新合金を使用し、重量をそのままに防御力を強化。

だが真に優れた点は、実験的に電子技術や最新の光学技術など最先端の技術を取り入れている点である。

メアル級はまさにラーズグランド社の最先端試験艇に相応しい、従来の飛空艇と一線を覆す戦空艇である。

この5隻は当初、このトラディツオ攻略作戦の予定に入っていなかった。それどころが、本来はイルム国が依頼、購入したものではない。

一ヶ月ほど前、ラーズグランド社側から、

「この最新型の実戦データを取りたいので、今度の戦争で使って欲しい」

という交渉があり、格安で譲ってもらったのだ。

イルム帝国情報部はラーズグランド社がユーラス国侵攻を察していると緊張したが、一日もせずに苦笑して緊張を解いた。

カタストロフィを雇っている時点で、侵攻が明白なのは一般人でもわかるというものだ。

それに少しでも戦力が欲しいイルム軍にとって、それはとても旨みのある申し出であった。

とはいえ、一部の人間は「本来のようにカタストロフィで実験すれば問題ないではないか」と懸念に思った。

カタストロフィとラーズグランド社の関係は公然の秘密だ。

だが最新型の戦空艇を手に入れる絶好の機会であるのも事実。

かくしてラーズグランド社の真意はどうであれ、イルム軍はこの申し出を受け取った。

しかし空軍はトラディツオ戦へ向けての艇隊の再編成が終了した直後であり、且つ慣熟させる期間もあり、他の艇隊への編入は難しかった。

ラーズグランド社との契約の件もあり、いっその5隻で何かすれば良いと考え、

空挺部隊と合同で予定に無かった東門攻略を急遽実施することになったのだった。

この作戦はあくまで副次的なものであり、主戦場である北門と西門の陽動でしかない。

ちなみに短期間で東門攻略を立案、実行まで事を運んで見せたのは、

イルム軍中佐グリムⅡエリオン、彼一人である。

ユーラス軍第五戦空隊を率いているのはハインⅡマックエイド少将である。

「敵は新型、しかもラーズグランド製だ。気を抜くな」

彼は敵艇の姿を確認すると、瞬時に敵の正体を見破り、気を引き締めるように指示を出した。

というのも先日、「敵がラーズグランド社の新型の戦空艇を5隻購入した」という情報が味方諜報員からもたらされていたのを、ハインは知っていたのである。

（こっちには随分と優秀な諜報員がいるな。一度会ってみたいものだ）

と、前々から思っているのだが、その正体を知っているのは総司令官であるフレイム元帥他、情報部の上層部数人程であり、彼等以外は絶対にその正体を知る権利は与えられていない。

もし、彼がその諜報員と会う事が出来るようになるのは、この西大陸西部地域が平和になった時であろう。

彼はトラディツオ郊外の実野に設置された臨時基地で「東門に敵飛空艇が現れた」という情報を聞いた時、それがその5隻だろうと直感で確信した。

敵が最新型であるとわかっていて彼に出撃命令が下された事は幸運であった。

彼はまともに撃ち合っては負けると読み、そこで先ずは奇襲で敵を撃墜しようとした。

ハインは出撃した後、僚艇に高度を上げるよう指示した。

砲撃というのは上からは当たり易く、逆に下からは当たり難い。

それに日頃から猛訓練で鍛えているユーラス軍にとっては、上からの砲撃は100発70中という命中率を誇る。

他軍の平均的な命中率が「良くて五割程度」である事と比べれば、ユーラス軍の七割とは驚異的な数字である。

朝七時から夜中十一時まで、昼飯の時間と一時間の休憩を除いた全ての時間が訓練なのである。

ユーラス軍の錬度は世界屈指と言っても過言ではない。

第五戦空隊は高度を取りながら全速で東へと向かって行った。

それから間も無く、彼等は東門に到着し、敵を確認する。どうやら味方に被害が出ているようだ。しかし敵はまだこちらに気付いていない。

「よし、“逆落とし砲撃”始め！」

ハインの号令で第五戦空隊の八隻は上空から一気に降下し始めた。

“逆落とし砲撃”とは、文字通り上空から下にいる標的へ向かって高速で降下し、

その状態で前部の主砲で砲撃をするという、世界中の空軍に浸透している戦術だ。

飛空艇の床が前方へ10度近く斜めになる。

（あと少しで射程に入る。頼むぞ！）

ニムビル級など軽量戦空艇の主砲は、メテウス級といった重戦空艇と比べて小さい。陸軍の大砲にも劣る口径である。当然、射程も短くなる。

スペック上のニルビム級の有効命中射程は800メートル。メテウス級は2200メートルである。

彼は敵がこのまま気付かない事を祈ったが、その祈りは届かなかったようだ。敵艇は短い弧を描きながら急旋回し始めた。

内心で舌打ちして、ハインは有効射程ギリギリで主砲発射を命令。砲弾は真っ直ぐ敵艇に向かっていったが、急旋回された為、全て命中しなかった。

その下方の地上で、ニムビル級8隻の放った砲弾が着弾して爆発した。

「失敗か……」

ハインはほんの少しだけ落胆したが、表情にも態度にも出さない。敵艇5隻は旋回を終えて機首をこちらに向けたまま、急上昇し始めた。

「敵艇ながらい運動性能だな。上昇力もなかなかではないか」

ハインは一人、敵艇の性能に感心していた。

敵はみるみる上昇してきて、直ぐに同高度に達した。

第五戦空隊は急降下を中止して平行飛行に移っていた。

奇襲は完全に失敗であった。

ハインは敵戦空艇に砲撃を開始、敵の目を地上から完全にこちらに向けさせた。

問題はどのようにして敵を撃沈するか、である。敵は五隻といえども新型高性能、撃ち合ったところでこちらが負けるだろう。

だからと言って退却すれば、敵は味方地上軍に砲撃を再開し、東門方面軍は全滅の憂き目に遭う。

それはこちらが敵を1隻でも残して全滅した場合でも同じである。ハイン少将に課せられた仕事は、敵戦空艇隊の撃滅に他ならなかった。

イルム軍第六戦空隊を率いているのはゼリアス、同じく少将である。

索敵士から「敵艇捕捉」の急報を受け、その方向に目を向けると、その上空に見慣れた形をした戦空艇がこちらに急降下する寸前であった。

ゼリアスは即座に急旋回、急上昇を指示し、敵の奇襲を未然に防いだ。

あと一分でも旋回が遅れていたら、彼の艇隊は少なからぬ損害を被

っていただろう。

彼はユーラス側の戦空艇を見て楽観視した。

（敵はニムビルだ。すぐに片がつくだろう）

彼はそう思いながらも、先の危機を救った「敵艇捕捉」を思い出した。

（しかしながら、ラーズの技術には驚かせる。レーダーなどという物まで作ってしまうとは……。

これが世界に広まったなら、今までの戦空艇の戦術が根本から覆されるぞ）

そう、このメアル級には簡易ながら電波を応用した電子探索装置、通称レーダーが搭載されているのだ。

艇の上部に設置されたアンテナが全方位に周期的に電波を発信。物体があれば電波が反射し、探知する。

とはいえ未だ開発途中の為、欠点も多く残っており、誤認も多く報告されており信頼性はそれほど高くはない。

それでも、この新機能は画期的であった。現に先の奇襲も未然に防ぐ事が出来たのだから。

この技術が更に発展すれば、逆落とし砲撃といった奇襲は完全に防がれる。ゼリアスが驚嘆するのも無理はない。

ユーラス軍の戦空艇が砲撃を開始したので、ゼリアスも敵空艇に砲撃を開始した。

砲撃を開始した途端、敵はバラバラに散開し始めた。

「散開だど？」

ゼリアスは一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに命令を下す。

「敵を逃がすな！ 各艇に通達、敵を各個撃破せよ！！」

彼の命令はすぐさま発光信号で僚艇に伝えられる。

イルム軍戦空艇5隻はバラバラに散開したユーラス軍戦空艇8隻を各個撃破するため陣形を解いたが、

相手は運動性を取り柄のニムビル級である。普通ならば、そう簡単には捉えることはできない。

前方と後方の主砲が砲撃主が定めたそれぞれの標的に向けて火を放つ。

両舷に設置された副砲の応酬は、空中に光の軌跡を残しつつ、昔の帆船同士の海戦を連想させる。

下降、上昇、左右への旋回、あらゆる三次元行動を駆使して敵艇の後方へ回り込もうとする。

空中戦はさながらドックファイトの形式を催していた。

本来、砲撃戦とは敵も味方も陣形を組んで直進しながら行うのが主流である。

空中の場合、同高度で静止している物をこちらも静止して狙い撃つても、熟練した砲撃手でない限り、当てる事すら出来ないというのが戦空艇の砲術の常識だ。

したがって旋回しながら砲撃しても、余程の熟練者か、才能を持った砲撃の天才でないと砲弾の無駄使いになるだけであった。

しかしメアル級には、その常識を打ち破るための切り札があった。新型の光学式測定器である。

従来型の光学式測定器は、小型の望遠鏡と何ら変わりはない。

西大陸某国の砲撃主が戦闘中に、

「俺はレンズ越しに敵艇を観賞する為にここにいるんじゃない。敵艇を撃墜する為にここにいるんだ！」

と叫んだという逸話が世界中に広まっている程だ。

よって、砲撃戦の際も誰もそれに頼ることはなく、常に各艇の砲撃主の目測であった。

しかしメアル級に搭載されている測定器は、調整された距離でレンズの焦点が合うようになっており、狙点と着弾が一致するよう工夫が成されている。

それによって、敵艇との距離がより正確に把握できるのだ。

ゼリアスはユーラス軍戦空隊が散開したのを見て、この測定器のあ

る我が方に有利と判断した。
一方のハインはある秘策をもって、散開を指示したのだった。

両軍はたちまち入り乱れての空中戦になった。数では勝るユーラス軍であったが、敵の正確無比な射撃に、逃げ回るしかなかった。

「ええい、何をやっておるかッ！ 敵はニムビルだ、一発でも当たれば撃沈できるボロ艇だ。一発ぐらい当ててみる！！ 何の為の測定器だ！」

次第にゼリアスはいらつきはじめたが、直後の「敵艇撃墜」の報告で落ち着きを取り戻した。

彼は本来、無能な将校ではない。

「味方艇、1隻撃墜！！」

ブリッジにいる一人が報告するが、ハインは動揺も見せない。ただ無言で頷くだけであった。

彼は10年前のトラディツオ攻防戦の生き残りであった。

あの悲惨という二言では言い尽くせないぐらいの戦場で、彼はユーラス軍第二戦空隊所属の主力、メテウス級戦空艇の砲撃長として戦った。

彼等の主戦場は常に街上空で、敵艇を外れた砲弾や、撃墜された戦空艇が街を破壊していった。

戦闘が起きる度に、彼は自分達が住んでいる街を自ら破壊していることに、深い罪の意識が芽生えていた。

時には行軍中の味方の真上に砲弾が落ちてしまい、少なからぬ損害を出してしまった事もあった。

「バカヤロウ！！ 味方に殺されて、ならこの戦場で一体誰を信用しろっていうんだ！？」

その際に被害にあった兵士達から受けた罵倒を、ハインは今でも覚えてる。

その誤射が原因で未だこの身は少将であるが、その事に比べれば気に留めようとすら思えない。

（もう、あの悲劇は繰り返してはいけないのだ）

ハインの心にあるのは、戦争が終わった後に自らに誓った決意であった。そしてその決意は、今も朽ち果ててはいなかった。

（一歩たりとも、敵を街にはいれさせん！）

「閣下」

艇長の言葉でハインは我に帰った。

「どうやら、敵は罠に嵌まったようだな。そろそろ味方の敵討ちと行くか！」

敢えて力強く、宣言するように艇長に答える。

艇長は頷くと、各所に指示を下す。

「砲弾装填！」

「砲弾装填、良し！」

「照準合わせ！」

「第二砲塔、上げ3度、右20度！ ……照準、良し！」

艇長がハインへと振り返る。

「主砲、撃て！！」

ハインは号令を下した。

ゼリアスは上機嫌であった。3隻目の敵艇を撃沈したからだ。

敵艇が黒煙と炎を上げて地面へと急速に下降していく。

これで敵の残りは5隻、その敵艇も高度を下げながら逃げ回っているだけであった。

このままいけば敵艇を全部叩き落せることが出来る。そうすれば地上を支援砲撃して、東門を制圧することも出来る。

そうなれば、フーガ達、東門方面軍は降伏するか、全滅するかどちらかであつたろう。そして彼の昇進は間違いなかっただろう。

（この年で中将！ このまま順当にいけば、空軍司令長官の座は無

論、総司令官の座も夢ではない！

いや、既に現実味を帯びている。大国イルム帝国軍のトップ、ゼリアス総司令官……いい響きだ！)

今後の約束された、少なくともゼリアスにとっては、約束されつつある輝かしい未来を想像して、薄ら笑みを浮かべた。

だが、彼の栄光は、敵将の大胆な戦術によって瞬く間に地に落ちた。

突如、メアル級戦空艇1隻の後尾が爆発した。

「どうした！　なにが起こった!?」

ゼリアスは驚いて通信士に問うが、通信士にも、そしてこのブリッジにいる誰もが起こったのか、分からなかった。

およそ40秒の間隔をあけて、今度は旗艦の右前方上空にいたメアル級1隻の左舷が爆発した。

「どうやら砲撃によるものだと思いますが、詳細は不明です」

「馬鹿なっ!!」

彼は何が起きているのか理解できなかった。

敵艇は逃げ回っているだけでどれも砲撃をしていない。況してや、新たに敵艇が現れたわけでもない。

被弾した2隻は相当の被害を被ったようだ。

後尾に被弾した1隻は推進部に大きなダメージを負ったらしく、艇首を下へ傾けて地面へと落ちていく。

あれは地面への不時着を免れないだろう。

左舷に被弾した1隻はバランスが保てないのか、艇を左へと傾けつつ、発光信号で撤退を一方的に申し入れて、北へと退却していく。

(ならば、敵は何処から撃ってきているのだ!?　敵地上軍が大砲でも持っているのか?)

いや、そんなはずはない。既に上空から敵を見たが、そんな物は持っていなかった。では何処だ?)

ゼリアスが無言のまま、長考している間にも、戦況は動いていた。メアル級戦空艇がまた1隻のニムビル級戦空艇を爆沈させたが、そのメアル級も謎の砲撃によって被弾。

砲弾は運悪くブリッジに直撃し、中にいた人間を全員戦死させ、空艇は地面へと落ちていく。撃墜であった。

（残る敵は4隻、こちらは2隻だ！？　我が方は最新型の戦空艇だぞ！？）

彼はこの現実が信じられなかった。

（此処の制空権を相手に取られたら、東門の我が味方部隊が孤立してしまう。）

しかし、この状況を報告して援軍を頼めば、昇進が……。何としても、此処はこの私が占領しなければならないのだ！）

ゼリアスの利己的な判断により、援軍要請は行われなかった。

ユーラス軍部にも欠点があるように、イルム軍部も官僚化による欠点があるのだ。

もっとも、援軍要請を送っても間に合うかどうかは不明であったが。その時、ゼリアスの脳裏に何かが過ぎった。何かがおかしい、とんでもない思い違いをしているような気がする。

しかし、その何かがわからない。

ゼリアスは改めて敵艇を見る。

（敵は4隻、だったな？　1隻、2隻、3隻……3隻！？）

彼はようやく、このペテンに気付いた。

「3隻しかないっ！！　残りの1隻は何処へ消えた！？」

彼は思わず叫んだ。そして、その場にいる全員が確認した。

確かに空中には3隻しかいなかった。最初にいたのは8隻、そして4隻を撃沈せしめた。

ならば残りは4隻のはずであった。

「残りの1隻を探せ！！」

その命令はすぐに残ったもう1隻の僚艦に伝えられた。彼らは敵艇3隻を追いかけるのをやめ、残りの1隻を探した。

気が付くと大分高度を下げていたようだ。既に薄くかかった雲の下を飛んでいる。ゼリアスは少し高度を上げるよう指示した。

そこで、彼は見つけた。その雲の更に上空で、姿を隠すように息を潜めている1隻が、こちらに主砲を向けている戦空艇を。

彼は理解した。味方の戦空艇3隻を沈めた砲弾は、あの戦空艇から撃たれたのだということに。

「いつの間にあんな場所にいたのだ!? 何故誰も気付かなかった!!!」

ゼリアスは味方の不手際を罵った。

「敵艇2隻、こちらに向かってきます。どうやら気付かれたようです」

「3隻に長短式電信トシ・ツで打電。敵の尻にプレゼントを届けてやれ、と」

「了解。直ちに伝えます!」

ハインはこの状況でも落ち着いていた。

彼らが雲の上方に高度を上げたのは、敵が味方7隻、ハインの戦空艇を除いているため7隻、を追い回していた時だ。

敵は当たりそうで当たらないニムビル級の機動力に苛立ち、意地になって追い回していた為、1隻の戦空艇が混戦の中を離脱した事に気付かなかった。

実際、ゼリアス自身も周りへの注意力が疎かになっていた事はない。もし気付かれたならば、ハインは後方から砲撃に晒されて空に散っていただろう。

そうなれば、この東門の攻防戦はイルム帝国の勝利に終わっていたに違いない。正に全滅をかけた危険な賭けであった。

しかし、この賭けに彼は勝った。味方は己の命を賭けて敵を低空に誘導し、ハインは敵を狙撃した。

上からとはいえ、薄い雲越し且つ距離がある中で正確な砲撃ができたのは、日ごろの猛訓練のおかげだろう。

余談になるが、ユーラス国は東大陸最東部の島国ジパンと友好関係にある。

ユーラス軍総司令官フレイムⅡコンラッドフォン元帥はジパンの軍事演習を見学した際、ジパンの兵士一人一人の実力の凄さに驚いたという。

特に空軍の戦空隊と海軍の艦隊は常に見事な隊列で、主砲を撃てばたちまち目標に命中したという。

彼は驚いてジパン軍総司令官にどうしてこんなに命中するのか尋ねると、ジパン軍総司令官は顔は笑っていたが、真剣な目つきで答えた。

「彼らの日頃の訓練の成果です。我が国の国力では、大国程の物量を整えることは難しい。

だから我々は量で戦うのではなく質で戦うのです。百発百中の一砲は、百発一中の百砲に等しいのです」

フレイムは彼のこの言葉に感動すると共に深く共感し、ユーラス軍にも猛訓練を導入する事を決定させた。

朝七時から夜中十一時まで、年間通しての休みが十日も無いという過酷な訓練に、ユーラス軍兵士は実に耐えた。

それはすぐそこに、イルム帝国という危機が迫っていたからだ。

逆に敵がいない状況ならば、兵士達の不満は抑えがたいものになっていただろう。

フレイムもそれはわかっていた。だから彼はイルム帝国との戦争が終わったら、猛訓練を取り止めるつもりである。

話が逸れたが、つまりその猛訓練が、この戦いで活かされているのだ。

「あの敵艇を必ず沈めろ！ これは命令だっ！！」

ゼリアス少将の命令でイルム戦空艇はハインの搭乗するユーラス戦空艇旗艦を撃墜するため、急上昇を命じた。

ラグナバル機関が鋼鉄の船を動かすエネルギーを生み出し、艇尾と底部から蒼白い炎が噴く。

その後方から今まで逃げ回っていたユーラス戦空艇3隻が追いかける。ハインの戦空艇は射線から逃れる為、前進を命じる。

イルムのメアル級2隻がハインに砲撃を開始するのと、後方のニムビル級戦空艇3隻が砲撃を開始するのは同時だった。

ニムビル級3隻からの砲撃はイルム戦空艇1隻に集中して命中し、空中爆発した。残るはゼリアスの戦空艇1隻のみ。

しかしハインの戦空艇もメアル級2隻からの砲撃が2発命中、爆発。たった二撃で既に航行不能の状態になりつつあった。

軽量級の宿命である装甲の薄さ。更にそこへゼリアスが砲弾を浴びせて来る。

「逃がすなっ！ 必ず落とせ！」

ゼリアスが声を荒げて叫ぶが、艇長はこの状況に絶望していた。

「しかし司令。このままではこの艇も落とされ、地上の空挺部隊が孤立し、敵艇の砲撃によって全滅してしまいます。」

ここは敵艇など構わずに一刻も早く援軍を要請すべきです！」

艇長の進言に、ゼリアスは顔を真っ赤にして怒り狂った。

「援軍だと？ 馬鹿が！ そんなものを頼んでみる、私も貴様も降格だぞ！」

今度は艇長が顔を真っ赤にして激怒した。

「降格ですと？ そんなものと兵の人命、どちらが大切だと思っているのですか！！」

その気迫は今にもゼリアスを殴りかかりにいきそうな勢いであったが、ゼリアスはそんな事を気にしなかった。

彼の頭にある問題の中に“人命の大切さ”などという、戦争の反対

に使われる典型的な一般常識論は存在しなかった。
寧ろ、彼はそれに少なからぬ嫌悪を抱いている。

（命の大切さだ？ そんなモノが大切だというのなら、何故人は戦争をするのだ。

そんな現実を見ずに美化された“綺麗言”など、今更、この世界で、何人も動かせはしない。

少なくとも、私は絶対に動かない……！）

彼にとって、信じ頼るべきは己が力のみだ。

たとえそれが、凡才の域を出ずとも、それが戦乱の時勢であるが故に……。

ゼリアスと艇長が言い争っている間にも、ユーラス軍戦空艇からの砲撃が続けられている。

メアル級の高性能を生かして今まで何とか回避してきたが、敵は恐ろしいほど正確に砲撃してきた。

（このままでは全滅だ！ 何とかしなくては……）

艇長は焦り始めるが、ゼリアスに指揮権がある限り、彼の指示は絶対なのだ。

例えそれがなんと愚かなで無謀な事であっても、忠実にそれを実行しなければならぬ。それが軍隊というもののなのだから。

その時、爆発音と同時にブリッジ内が激しく揺れた。その後すぐに被害報告が入ってきた。

「敵弾命中！ 動力室の近くに被弾し、動力炉に被害が出ています。最大出力、36%ダウン……！」

この被害報告を聞いた艇長は、決断した。

「通信士、総司令部に現状を打電しろ！ 総員退避せよ！」

艇長の言葉を聞いたゼリアスは耳を疑った。艇長が今行った行動は明らかに指揮の違反であった。

通信士も艇長と同じ気持ちだったのか、即座に長短式電信で総司令

部に現状を打電し始める。

「貴様ッ、今の行動は軍法会議ものだぞ！ 覚悟は出来ているのだろうか！？」

「無論、承知の上です。軍法会議に掛けるのならどうぞご自由に。その時はあなたも一緒です、ゼリアス少将」

「なんだと？」

「味方を見殺しにしようとした事を、小官は軍法会議で証言致します。小官とブリッジにいる全員が証人です。」

その罪、決して軽くはありませんぞ！」

「なッ！？」

「それでは、先に失礼致します」

艇長はそう言うのとブリッジから出て行き、それに続いて他の要員もゼリアスを見向きもせず次々と出て行く。

ブリッジに残ったのは、ゼリアスは一人だけとなった。

己が力だけを頼り過ぎた男は、結局味方に見放されたのだった。

「なぜ……何故こうなってしまうのだ！！」

彼は誰もいなくなったブリッジの中で叫んだ。

つい先ほどまで手に届く位置にまで見えていた空軍司令長官の座も、総司令官の座も、もはや幻のように消え去っていた。

総員退避命令が下され、次々と脱出用の小型飛空艇が飛び立っている。

5隻の小型飛空艇が飛び去った後、最早残っている者はゼリアス一人除いていなくなっていた。

ふと、彼の目にハインの戦空艇が見えた。

ブリッジから強化ガラス越しに見えるその戦空艇は、各所から黒煙を出しながらも、まだ辛うじて空に浮いていた。

「アレだ、アレのせいだ。私の名誉も栄光も未来も、全て失ったのは……！」

ゼリアスは小声で呟いた後、カッと目を見開いて操舵席に滑り込んだ。

「叩き落としてくれるわアアアアア!!」

ゼリアスは叫びながら、全速でハインの戦空艇に向かって走り出させた。彼の中に理性はもう存在しない。

上空にいたユーラス軍3隻は、速度と高度を落としつつあったゼリアスの戦空艇は撃沈寸前と思い込んでいた。

それに先程、脱出用の小型飛空艇数隻が飛び出すのを目撃した。よって、まさかその敵艇が自分達の旗艦に向かって特攻を仕掛けてくるなど、全く夢にも思わなかった。

彼等が対応した時は、既に手遅れであった。

「総員退避せよ!!」

敵艇2隻からの砲撃を受けたニムビル級戦空艇は、2発の命中でかなりの被害が出ていた。装甲の薄いニムビル級の救いがたい弱点である。

ハインはあくまで冷静に総員退避を命令した。ブリッジの各員も次々と出て行き、残ったのはハインと艇長のみになった。

「君も早く逃げるんだ」

ハインは艇長を促す。

「いえ、自分は各部に残っている者がいないか確認してから最後に脱出します。閣下こそ、早く退避してください!」

「いや、それは私の役目だ。君は私が行くまでの間、退避した乗員の統率を頼む」

「しかし……了解です。先に行ってお待ちしております」

艇長は決断して、ブリッジから出て行く。ここで議論している時間すら惜しんだのだ。

それほどにまで状況が切迫していると、艇長も感じ取ったのだろう。

それに、艇長は上官の性格を熟知していた。あの御方は言い出した

ら、テコでも動かないからな……。

ハインもブリッジから出て機関室、動力室などを素早く見て回った。

「誰が残っている者はいるかっ!!」

ハインは叫びながら通路を走る。既に各所で火事が起き始めている。この戦空艇が墜落するのも時間の問題だろう。

(どうやら、残っている者はいないようだな)

彼はそう思い、脱出用エレベーターに向かおうとして、ふと足を止めた。そして彼は耳を澄ませた。

微かにだが、呻き声が聞こえた気がしたのだ。だが何も聞こえない。

(気のせいだったか?)

しかし、何故か気になった。軽く見回して、通路の右奥にある部屋に目が留まった。

そこは右舷第二砲撃室、先程の敵戦空艇の砲弾が直撃した場所であった。

彼はその部屋に入った。中は血の匂いが充満していた。

床は血の海になっており、腕や足がバラバラに飛び散っていたが、ハインは気にせず辺りを見回した。

このような悲惨な光景は、前の戦争で見慣れていたので。

その事に気付いた時、彼は苦笑した。

(この光景に見慣れるなど、私も危ういものだな)

入り口から見たところ、生きている者はいないようだった。ハインは入り口から少し歩いて中へ入っていた。その時、

「うっ……」

と、微かにだが声が聞こえた。ハインは驚いて振り向くと、入り口からは死角になっている場所に、一人の若い下仕官が倒れていた。

ハインは駆け寄って若い下仕官を抱き起こした。

「危うく見逃すところだった。おいっ!　しっかりするんだ!」

その下仕官は息はあるものの、出血が暫く続いた所為か、意識が無

かった。

「これは……、急いで医者に行かないとマズイな！」

ハインは血塗れの下仕官を背中に背負って、急いでエレベーターまで走った。

（一応一通り見たが、生き残っている者はもういないはずだ）

本当なら確認したいところだが、動力が落ちてきているようで、既に艇内は傾斜している。最早一刻の猶予も無い状況であった。

（これ以上、若者の命を失わせてたまるか！）

ハインは必死で走った。エレベーターは丁度この階で止まっていた。艇長が上に止めておいてくれたのだろう。

「相変わらず、気の利く男だ」

ハインは苦笑しつつエレベーターに乗り込み、下降用レバーを下げた。

このエレベーターは脱出小型飛空艇がある下層部の格納庫まで直通である。

これを降りたらもう目の前には小型飛空艇が並んでいるはずであった。

（どうやら、間に合ったようだな……）

降りていくエレベーターの中で、ハインはようやく安堵した。

しかし背中に背負っている下仕官の男はまだ息があるとはいえ、急がなければ間に合わなくなる。

彼は焦る気持ちを抑えながら、エレベーターが下りるのを待った。

実際はそんなに長く乗っていないのだが、ハインは数分も乗っていた気がしたが、漸くエレベーターが止まった。

ところが、入り口のシャッターが開かなかった。どうやらどこかで引っかかっているようだ。

彼は背中の男を降ろすと、全力でシャッターを引っ張った。しかし、なかなか開かない。

（引っかかっているのか！？）

時間はそんなに無い、焦りを覚えながらも全力でシャッターの隙間

を開けてようとする。と、

「閣下！」

聞き覚えのある声が聞こえた。それもそのはず、先程別れたばかりなのだから。

「閣下、お待ちしておりました。他の者は既に退避しました！」

シャッター越しに艇長の安堵の表情が伺える。

「挨拶はいい！ それよりも手伝ってくれ！」

「了解！」

ハインと艇長の二人でシャッターを引っ張る。少しずつシャッターが開いていき、何とか一人がギリギリ通れる位の隙間が出来た。

「よし、まずは彼を！」

ハインは隙間から重症の男を渡す。艇長は傷を悪化させないように慎重に引っ張り、無事に通過させた。

「閣下、急いでください！」

「その男を連れて先に乗れ。私もすぐに行く！」

艇長は男を担いで、急いで飛空艇に乗り込もうとした。

その時、“彼”の世界は激しく揺れた……。

激震が起こり、耳の鼓膜が破れるような轟音が轟いた。

艇長は何が起こったのかまるで分からなかった。飛空艇は無事のようであったが、非常に危険な状況であるのは明白だ。

小型飛空艇の脱出用に開いてあるゲートから地面が見えるほど、急な角度で高度が下がり始めていた。

「一体、何が……？ 閣下！？」

彼がエレベーターに振り返ると、そこにはエレベーターなど無かった。

ゼリアスの戦空艇が突っ込んできた際、エレベーターを押し潰して

しまったのだ。

無論、その中にいた人物も……。

完全に破壊されたエレベーター跡から、紅色の血だけが流れていた。

「か、閣下……？ 閣下アアアツツ！！」

それから一分も経たない後、この戦空艇2隻は地面に激突。

その衝撃でラグナバル機関にバル石が大量に混入し、機関の熱エネルギーはついに臨界点を超えた。

瞬間、2隻の飛空艇を跡形もなく吹き飛ばすほどの大爆発を起こした。

第一章 第11話 〈東門攻防戦〉

空の戦いがあれば、地上の戦いもある。

空ではハイン少将が上空へ敵を誘導している最中、地上ではハウゼル大尉率いる第一九中隊と傭兵で構成された東門守備隊の、フーガ達の戦いが始まった。

外に造られていた簡単な陣地は先程の砲撃で最早陣地と呼べる代物ではなく、兵士達の間には未だ混乱が続いている。

「門外にいる者は中に入れ！ 敵を中で迎撃する！」

ハウゼルの号令で、外にいる味方は一斉に東門へと向って走る。無論、フーガ達もだ。

ハウゼルの狙いはおそらく、狭い東門を利用して、敵を包囲撃破するつもりなのだろう。

「どうやら、“一応は”空の脅威は無くなったみたいだな」

フーガは空を見ながら呟く。

“一応は”と、皮肉な口調で言ったその言葉には、彼が現状を把握している事を意味していた。

空では戦空艇隊同士の戦いが行われている。

「何言ってるのよ！？ 空が無くなっても地上にあるのよ！！」

「……何言ってるんだ？」

リリイの訳の分からないセリフに、何気なく突っ込むフーガ。どうやら彼女は混乱中のようだ。

リリイには悪いが、やはりEクラスの程度は知れているな……。

彼らは東門の中へと入った。中へ入ったと同時に、

「よう！ あんたらも無事だったみたいだな！」

と、陽気で聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あ、カムロス。よく生きてたわね」

素っ気無くリリイが答える。感動も感心も何もあったものではない。

「当たり前だ。あんな“チンケ”な砲撃じゃ、俺は倒せねえぜ」
カムロスはそれに気付いていない。本人にとっては知らぬが仏だろう。

だが、間もなく戦いが始まるというのに、日常的な感覚で会話をする二人。

リリイも何時の間にか平常心を取り戻していた。

「……来たぞ、気を付けろ」

静かに、しかし凄みのある声でフーガは言った。

フーガの言う通り、東門から敵が突入してきた。

突入してきた敵兵の一部がすぐに横二列に並び、前列は中腰、後列は立った状態で軍用銃であるマスケット銃を構える。

使用しているマスケット銃は弾丸を銃身の後方で装填できる後装式だ。

流石は大国イルム帝国。銃口から火薬と鉛弾を装填する前装式や、更には火縄式のマツクロック銃などといった軍用銃を使用している軍がまだまだ主流な中、

既に後装式のマスケット銃への転換を完了させているようだ。

対する東門を防衛するユーラス軍第一九中隊は、前装式のマスケット銃しか装備していない。

（武器性能と錬度で相手に劣る。だが数はこちらが少し上。なら……）

（一気に接近して白兵戦に持ち込むか……！）

ほぼ同時にそう思ったのは、フーガとハウゼルの二人である。

隊列に要した時間は10秒にも満たない。かなり訓練された連中だ。

それに比べて、こちらは外から兵士達が東門内に撤退してきた事でちょっとした混乱状態にあった。

ハウゼル大尉が必死で次々と指示を下している為、兵士達は辛うじ

て潰走状態を免れている。

やはり正規軍とはいえ、新米揃いなのはどうかと思うと、フーガは思った。

戦争の玄人のはずである傭兵も、その半数が混乱している。

とはいえ、残り半数は自分がやるべき事を理解しているようだ。

それぞれ支給されたマッチロック銃や自前のリボルバー銃を構え始めている。

「まずは、先制攻撃といきましょうか！」

混乱していない半数の一人であるリリィは、腰から二挺拳銃を取り出し構え、そして次の瞬間には撃っていた。

敵前列の中央右あたりでマスキット銃を構えていた二人がうずくまる様に倒れ込んだ。

相変わらず早く神懸りのな命中精度だ！

彼我の距離は70メートル前後。軍用銃ならともかく、拳銃は一般的な有効射程が20メートル前後しかない。

ファール・シリーズとはいえ、早撃ちで連射ともなればそれは天才の域である。

間違いなく、リアリスⅡホープは銃撃の天才だ。

「おっしゃ！」

掛け声と共にカムロスも腰から銃を片手で抜いて構える。そしてフーガもまた、何時の間にか右手に銃を構えていた。

「へ？　って、あ、あなた達、銃持ってたの！？」

新たに標準を合わせていたリリィは驚きの声を上げる。

「刀だけじゃ、戦場は生き残れないぜ」

「傭兵として当然だろ？　剣は近接戦闘用だぜ。遠距離の敵にはこれが一番さ」

さも当然のように答える二人。

「……なんとなくムカつく」

三人の計四つの銃が、一斉に引き金を引かれる。

四発の銃声と同時に、敵兵が三人ほどよろける。二人が腹部に、一

人が腕に命中した。

因みに、リリイの二挺は二人の腹部へ命中、フーガの銃弾は何とか腕を掠めるように当たり、カムロスの銃弾は何処かへ飛んで行ったようだ。

評価すれば、確実に命中させたりリイは神業の域、辛うじて当てたフーガは熟練者の域、当たらなかったカムロスは一般の域といったところである。

少し遅れて、他の傭兵達もそれぞれ発砲を始める。

「今だ！ 全軍突撃せよ！！」

ハウゼルの号令が飛ぶ。それを合図に、ユーラス軍が突入した。

同時に、イルム軍がマスケット銃を一斉射撃する。

先頭にいたユーラス軍兵士達が撃ち抜かれて倒れる。それと同時にイルム軍も軍用銃^{マスケット}を背中に戻し、剣を抜く。

そこにユーラス軍が斬りかかる。たちまち敵味方入り混じっての白兵戦になった。

「こういう場合は剣を使うのさ」

カムロスは背中から長剣を取り出す。フーガも無言で鞘から刀を抜く。リリイは銃に弾を詰める。

「それじゃ、やるか！！」

カムロスは気合を入れて敵中に飛び込んでいった。フーガとリリイも後に続く。

三人はそれぞれ敵兵に向かって走り出す。

フーガは目の前にいた敵兵を左手のリボルバー式の拳銃で撃つ。

シルバー色の彼の銃のグリップには、リリイの銃と同じ、鷹を描いた模様がグリップの中央に入っている。

それはファール・シリーズと呼ばれる拳銃である。

撃たれて倒れた敵兵をジャンプで飛び越え、一瞬で銃を腰にしまう

と、今度は両手で刀を握る。

そして敵兵数人の間、人と人の間に出来る僅かな“道”を疾風の如くすり抜けつつ、その際に一閃を決める。

フーガほどの動体視力がなければ“道”を見つけ出すことは出来ないだろう。

フーガが通った後、敵兵の六人が血飛沫をあげながらバタバタと倒れた。

返り血を避けながら、フーガは鋭く戦況を見渡し、無言で次の敵に向かつて行った。

リリイが二挺の拳銃で自慢の早撃ちを繰り出すと、瞬く間に五人近くの敵兵が一気に倒れた。

二挺の銃は何れもシルバー色。グリップの中央にファール・シリズを表す鷹を描いた模様が入ってる。

敵兵と一定の距離を保ちながら、リリイは瞬時に弾をリロードする。

銃には二種類のタイプが存在する。

即ち、フーガやリリイ、カムロス等が所持しているリボルバー式の拳銃が一つ。

拳銃は携帯性の良さと扱い易いという事から、主に兵士や傭兵の標準装備、一般人の護身用等として使っている。

必中距離は平均およそ20メートル前後。

近接戦闘では無類の強さを誇る一方、六発撃つと弾切れとなる為、近接戦闘の主流は未だ剣や槍だ。

そしてもう一つ、それはマスケット銃やマツチロック銃などといった軍用銃である。

銃身が長く両手持ちの銃で、その必中距離は約80メートルと拳銃

の比ではない。

また威力も近距離で軍用銃を撃ち込めば、鎧を装着している人間を軽く二人は貫通できる。

反面、連射性はリボルバーに劣る。何故なら軍用銃は一発撃てば銃弾を再装填しなければならない為だ。

近年は銃身の後ろから銃弾を装填する後装式のマスケット銃が実戦配備されてきているが、

未だ銃口から直接火薬と弾丸を入れる前装銃や、火縄式のマッチロツク銃を使用している軍も多い。

軍用銃は大抵の場合、軍隊か傭兵部隊にしか販売されず、一般に回る事を禁止している。

リリイがリロードしている隙を狙って、敵が接近してきて剣を振るう。

それをリリイはギリギリそれを避ける。その際に髪が二、三本ほど切られた。

彼女の両手は常人以上の高速で、しかも機械的な精確さで、二挺の銃に弾を装填する。

「装填完了！」

リリイが二挺に弾を装填するのに要した時間は、驚きの5秒台だ。

同じ事を熟練した兵士が平常心を持って行っても、早くても10秒以上は掛かるだろう。

そして、リリイは再び敵兵を素早く、的確に射抜いていった。

「はああああ！」

裂帛の気合を込めてカムロスは剣を振るい、相手の剣を叩き落とす。

そして返し刃で相手を突き刺す。

長剣は相手の鎧を突き破り、致死の傷を与える。カムロスは相手を蹴り、その勢いで突いた剣を抜いた。

直後、右方に悪寒を感じ、本能的に振り返って剣を振るう。
ギンッ

カムロスの長剣は敵兵の剣を防いだ。そのまま相手を剣ごと薙ぎ払う。

カムロスに押されるように後ろへ飛んだその敵兵は、バランスを崩してそのまま仰向けに転んでしまう。

相手の危機はカムロスにとっては好機だ。追い討ちをかけようとカムロスは相手に駆け出す――

瞬間、左肩に鈍く重い衝撃が走った。

「くっ」

思わず肩を押さえるが、鎧にひびが入っているだけで怪我は無いようだ。

後ろを振り返ると、敵兵の一人が驚いた様子でカムロスに向かって拳銃を構えている。その銃口からは硝煙が上がっている。

相手にとっては必中の思いだったが、どうやら銃弾の角度が悪かったらしく銃弾は鎧に弾かれたらしい。

そんな幸運などカムロスは知る由も無く、

「っやろう！」

すぐさま腰から拳銃を取り出す。相手が気を取り直して拳銃を撃つが、カムロスは咄嗟に横に飛んでそれを避け、逆にカムロスが撃ち返す。

銃弾は相手の腹中に命中、相手はその場に膝をつき、倒れた。

「ふう」

カムロスは銃を再び腰のホルダーにしまう。こんな混戦では弾をリロードする事は不可能だろう。リリィ以外は。

カムロスはリリィのように素早いリロードをする事は出来ない。というより熟練の兵士やフーガでも無理だ。

要するに、リリィのリロードが常識外れであるだけなのだ。

カムロスは再び両手で剣を握り直す。と、

ギンッ

カムロスのすぐ後ろで金属同士が重なる音がした。

「油断するなよ、カムロス」

カムロスが振り向くと、フーガが左手に持った鞘で敵兵の剣を止めていた。その敵兵は、さっき転んでいた相手だ。

もし、フーガが敵の剣を止めていなかったならば……。

カムロスがそれを理解した時には、フーガはそのまま右手の刀でその敵兵を鎧ごと斬り裂く。

フーガは一瞬だけカムロスを一瞥すると、他の敵兵に向かって走り出していた。

カムロスは暫く呆然とフーガの後姿を見つめていたが、

「……情けねえ」

自嘲気味に小声で呟くと、集中力を新たに、再び長剣を握り直して敵中に飛び込んで行った。

戦闘開始からどのくらいが経過したのだろうか。

フーガは辺りに注意しながら周りを見渡す。戦況はわからないが、敵の方が少し優勢に見える。

元々選りすぐりの精鋭達は北門と西門の守備隊に充てられていたため、この東門に配置された兵士や傭兵は決して強靱とは言えない。対してイルム軍側は正規軍、しかも精強な逸材が選ばれる空挺部隊である。時が経つにつれて、戦況は次第に傾きつつあった。

「フーガ殿!!」

突然、フーガは後ろから声を掛けられた。振り向くとユーラス軍の軍服を着た若い士官が立っていた。階級証は准尉を示している。

「フーガ殿、ハウゼル大尉が!!」

彼の言葉に、フーガは一瞬ハウゼルの言葉が思い浮かんだ。

（「私が指揮を取れない状態に陥った場合、君が副官をサポートしてくれないか？」）
まさか!?

「先に行く！」

フーガは准尉を追い越し、すぐさまハウゼルの所へと駆け出した。指揮所は先日と同じ建物のはずだ。

東門前の広場を抜け、市街地の入り口付近にある建物の一つが指揮所となっている。その建物の前に、敵味方の兵が血を流して倒れている。

指揮所に到着したフーガは、立ち止まることなく建物の中へ入った。

中にも敵兵の死体が転がっている。やはり此処にも攻め込まれていたのだ。

フーガは構わず奥へと進み、そこでハウゼルの姿を確認した。

「ハウゼル大尉！」

「おお、君か、どうやら無事のようなだな。流石だ」

ハウゼルは笑顔でフーガを迎えるが、フーガはハウゼルの右腕に気付いた。

「ハウゼル大尉、その腕は……」

「ああ、これかね」

ハウゼルは仕事で失敗したかのような口調で話す。彼の右腕は肘から下が無かった。

「少し油断してしまっただけだ、自業自得というものだ。どうやら部下が早とちりしてしまっただが心配する事はない。指揮を取るのに支障は無い」

「しかし大尉！？」

ハウゼルの隣にいる副官、ライハント少尉が難色を浮かべるが、ハウゼルは気にしない。

短くなったその右腕からは新鮮な血が流れ落ち、衛生兵が懸命に包帯を巻いている。

その時、大爆発が起きたような轟音が聴こえ、衝撃がまるで地震の

ように地上を揺らした。

その音響は凄まじく、両国の兵は一時的とはいえ、互いに沈黙した。

「なんの爆発だ!？」

驚きを何とか隠しつつ、ハウゼルがライハントに聞くと、ライハントもわかるはずがなかった。

この爆発はゼリアスの戦空艇とハインの戦空艇が地面に激突して起きた大爆発であったのだが、フーガ達が知る由もない。

大爆発から僅か数十秒後、今度は城壁の向こう側から稲妻のような轟音が聞こえてくる。

それは、飛空艇の動力であるラグナバル機関特有の轟音であった。両軍の兵士は瞬時に理解した。空戦は終わったのだと。

彼らは息を吞んで、城壁を見た。果たしてどちらの空軍なのか。それによって、地上の勝敗も決まる。轟音がすぐそこまで近づいてきた。

そして、城壁を飛び越えるように低空から飛び出してきたのは、ユーラス軍戦空艇三隻であった。

勝敗は決した。

ニムビル級戦空艇はイルム軍が集中している箇所へ次々と砲撃を開始する。開始とは反対の状況だ。

空艇の外通路へ出て下方へ向かって銃を撃つ者もいた。

また地上でも、それまで押されていたユーラス軍は一気に盛り返し、イルム軍へと襲い掛かった。

イルム軍の崩壊、潰走は時間の問題かに思われた。

だが、この状況の中でもイルム軍空挺部隊は何とか態勢を保って戦闘を続けた。

更には戦闘を行いながら、何時の間にかイルム軍は東門前に部隊を

集結させて、唯一の退路である東門から北門に向けて退却を始めた。

東門の狭さを利用した銃の一斉射撃でユーラス軍の追撃を防ぎながら、

イルム軍は退却の際に生ずるはずの混乱、被害もあまりなく、戦場から退却した。

敵ながら、指揮官が優秀なのだろう、退却のタイミングも方法も見事だった。

「見事だな」

「そうですね」

戦場に復帰していたハウゼルとフーガが相手の指揮官を賞賛する。

「大尉、敵は退却しております！ 追撃のご命令を！」

隣に待機しているライハント少尉が興奮気味にハウゼルに進言したが、

「その必要は無い、後は連中がやってくれるさ。それより、被害状況の報告を急がせてくれ」

ハウゼルは不敵に笑って、そう返した。

その後、見事な退却をしたイルム軍空挺部隊であったが、

先の空戦で生き残った3隻のユーラス戦空艇の執拗な砲撃を受け、北門を前に壊滅近い損害を出していた。

その砲撃の混乱の最中、イルム軍空挺部隊の指揮官であるブラッド少佐は何時の間にか姿を消しており、そのまま行方不明となった。

第一章 第12話 〈北門会戦〉

東門の戦いが始まるより少し前、北門にて主力同士の水戦が始まった。

北門はトラディツォの玄関とも言ふべき入り口であり、その大きさ、広さは東門や南門と比べ物にならない。

空では主力戦空艇隊同士による砲撃戦、地上では両軍合わせて万を超える大兵力の攻防戦。

――後の戦史名高い、『北門会戦』である。

北門の守備に配置されたのはユーラス軍第二軍、司令官はランザード大将だ。

各地司令部の人員や指揮官は主に総司令官であるフレイム元帥が任命を下したのだが、

彼は激戦が予想される北門へ真っ先に第二軍を配置し、その司令官にランザードを据えた。

それだけで総司令部のランザードの手腕に対する期待が伺える事だろう。

始まりを告げたのはユーラス軍の航空部隊、司令官クロムス中將率いる第一戦空隊、第二戦空隊の連合艇隊、

通称クロムス戦空隊による敵地上軍への砲撃だ。

編成はメテウス級重式戦空艇5隻、ライジェ級中式戦空艇8隻、ニルビム級軽式船空艇14隻の合計27隻。

クロムス中將はイルム軍へ高度から遠距離砲撃を開始した。敵が攻撃を開始する前に少しでも撃破しておこう、という事だ。

しかし、敵も黙ってはいない。

クロムス艇隊の更に上、飛空艇の限界上昇高度から、イルム軍主力艇隊が急降下で接近、逆落とし砲撃を開始した。

イルム軍の航空部隊を指揮しているのは新進気鋭の若き中将、カーチス中将である。

イルム軍の編成はメテウス級7隻、ライジェ級中式戦空艇10隻、ニルビム級軽式戦空艇16隻の合計33隻。

クロムスは艇隊に緊急回避を命令するがライジェ級1隻に砲撃が命中、撃墜はしなかったが少なからぬ損害を受ける。

敵艇が飛び去った後、クロムスは再び隊列を戻した。カーチスも逆落とし後の隊列を整える。

そして、航空部隊の大規模な砲撃戦が始まった。

数ではイルム軍航空部隊の方が上回るが、質では猛特訓のユーラス軍航空部隊が上である。

空戦は互角のまま、長期戦になりつつあった。

「一斉射撃用意、砲撃始め！！」

第三大隊指揮官ウィンス大佐の命令と同時に、北門の外側に構築されたユーラス軍の陣地の野砲と、門の上に並べられた大砲が一斉に火を噴いた。

後世に『北門会戦』と呼ばれる第二次トラディツォ攻防戦が、世界の戦史に残る戦いが幕を開いたのである。

北門城壁外陣地はユーラス軍によって半ば要塞化されており、

部隊も精鋭と名高い第一大隊、第三大隊、第五大隊、第七大隊、第一一大隊からなる第二軍、およそ8000人が守備に就いている。

城外で敵を迎撃しているのはウィンス大佐率いる第三大隊。

野砲の数は70門ほど配備され、また門の上には大砲の一種である榴弾砲が20門設置されている。

一方のイルム軍の北門攻略軍は、ユーラス軍の予想を遥かに上回る大軍であった。

ユーラス軍は陸軍を六つに編成している。
それぞれ現在の所在は、

第一軍（1万2000人）は首都カルニア防衛及び総司令部直属。
第二軍（1万人）はトラディツォ北門防衛。
第三軍（1万人）はトラディツォ西門防衛。
第四軍（1万人）はカルニアへ続く街道の防衛。
第五軍（1万5000人）は外海に接しているエスト港の防衛。
第六軍（8000人）は統合されず、各都市の守備や輸送路の確保などに従事している。

因みに、トラディツォ東門守備隊の第一九中隊と南門守備隊の第三八中隊は第六軍の所属となっている。
よって、トラディツォにいるユーラス軍の主力は第二軍、第三軍の二個軍団で、兵数は凡そ2万人である。

一方のイルム軍は陸軍を八つに編成している。
第二次トラディツォ攻防戦の一ヶ月前の配置は、

第一軍（1万8000人）は帝都ラスグラード防衛。
第二軍（1万4000人）、第三軍（1万2000人）はユーラス国との国境駐屯。
第四軍（1万2000人）、第五軍（1万2000人）はハイベル連邦との国境駐屯。
第六軍（1万2000人）、第七軍（1万人）はクラーク王国との国境駐屯。
第八軍（1万人）は各都市の警備など。

そして、第二次トラディット攻防戦時の配置は、

第一軍（1万8000人）は帝都ラスぐラード防衛。

第二軍、第三軍、第四軍、第五軍、第六軍（総兵力6万2000人）がトラディット北門方面攻略軍。

第七軍（1万人）はトラディット西門方面攻略軍。

第八軍（1万人）は各都市の防衛および補給路の確保。

つまり、北門を守備するユーラス第二軍は、僅か1万人で六倍近い敵を真正面から相手することになったのだ。

砲撃戦を繰り返している空軍が上空からイルム軍の兵力を確認、それが司令部に報告されると、ユーラス軍は大いに動揺した。

これには流石のランザードも目を見開き、首都カルニアの総司令部もこの情報を聞いて驚愕した。

「何処からこんなに大量の兵力を集めてきたのだ!？」

総司令官のフレイムが思わず叫んだ程であった。

兵力の集中と敵の分散。それは兵法を知る者ならば誰もが当たり前の如く知っている事である。

古今東西の戦術家は、如何にして敵を分散させ、各個撃破していくかという心得を知っていた。

また戦略家は、その戦場に如何にして大兵力を送るかという点において、戦術家としての優劣が決まる。

総司令官とは言え、実際に戦場で指揮をするのは各軍の司令官であって、総司令官ではない。

無論、最高指揮官は総司令官である事に変わりはない。

では総司令官とは主に何をするのか？

それは各地司令官や指揮官の配置の決定、何処にどの程度の兵力を置くか、という言わば戦争が始まる前の下準備である。

一見、地味に見えるかもしれないが、これ程重要な事は無い。

大戦略家と呼ばれる者は、時には世界をもペテンに引っ掛けて、戦場に大兵力を送り込む。

このトラディツオのイルム軍の大軍は誰もが認める世界最高の傭兵であり、

そして稀代の戦術家、戦略家でもある戦争の天才、ゼロⅡニヒツが仕掛けたペテンであった。

ユーラス国側が事前に得た情報では、イルム国の全兵力の内、この戦争に投入できる兵力は四個軍団であった。

残り四個軍団はハイベル連邦やクラーク王国の国境の守備や各所の防衛に当たらせなければならなかった。ここにゼロは目を付けた。ゼロは“威し”に近い外交でハイベル連邦とクラーク王国に中立を取らせると、

両国に悟られないよう密かに両国の国境に駐屯させていた兵力を動かし、この戦争に動員させた。

勿論、イルム国内で反発の声も上がった。その内容は主に、

「若しも相手が中立を破って攻めて来たら如何するのだ？」

という内容だった。それは確かに最もな意見ではある。しかしゼロの反論はこうだった。

「どちらにしろ、この戦争に負けたならばイルム帝国に次は無い。

ならば、全ての戦力を持って攻め込むのが道理ではないのですか？

尤も、もし両国が攻めて来たのなら我々が全力を持って逆に攻め滅ぼしてみせます」

このセリフで、というよりも最後の一言で、反対を唱える人はいなくなつた。皆が悟つたのだ。ゼロは正に“本気”なのだと……。

またゼロは西門、南門を捨てた。

ユーラス軍が北門と同じく主戦場になるであろうと予想していた西門には、足止めを目的として第七軍のみしか兵を送らなかった。これは兵力の分散であると判断した訳である。

実際、トラディツオの二個軍団は北門、西門にそれぞれ分散しており、ユーラス軍は各個撃破の危機に陥る事となる。

結果、北門司令部は一個軍団、1万人の兵力でこの大軍、およそ6万2000人のイルム軍と戦わなければならなかった。

ちなみに本来なら東門も捨てる予定だったのだが、それは以前に述べた通りで、空挺部隊も空軍所属であり作戦に支障はないため東門攻略作戦は実施された。

ユーラス国側にとっては悪夢だろう。敵は何時の間にか全軍の半数以上の戦力を、この北門にだけ投入してきたのだから。

自軍の六倍もの敵軍を相手にしながら、北門城外陣地は何とか粘り続けていた。それは門の上に配置された榴弾砲の威力のおかげだ。

この20門の一斉射撃の威力は凄まじかった。

一斉射撃の砲弾が集中した場所は大穴だけが残り、後に何も残さなかった。これにはイルム軍の兵士たちも戦慄した。

しかし、「運も実力の内」と言うが、これはユーラス軍にとっては悲運と言えるだろう。

空では航空戦力同士の砲撃戦が今なお続いている。その空中戦の流れ弾が、たった三発だけ北門の壁に命中した。

しかし、重量のある榴弾砲が20門も並び、また先程からも敵野砲も何発か北門に命中していた。

つまり、通常よりも脆くなっていた所に、破壊力のあるメテウス級戦空艇の主砲が三発も命中したのだ。

この点は、ユーラス軍側のミスであった。

尤も、門の上に配置すれば地上戦が終わった後に仰角の不可な大砲でも敵戦空艇を狙い撃つことが出来た。また遠くにも砲弾が届くと

いう利点もある。

しかし、「門が崩れるのでは？」そう考えた者は居なかった。利点だけを見て、弱点を見なかったのだ。

「も、門が……！！」

それに気付いた兵士の一人が叫ぶが、もう遅かった。

それは、一瞬であった。

あっという間に壁が崩れ、20門の大砲とそれを撃つ砲撃兵、そしてその下にいた部隊の半分が城壁の下敷きとなり、壊滅した……。

その後の結果は言うまでも無いだろう。

文字通り砦を失い意気消沈し、火力が半減したユーラス軍と、思わぬ幸運に士気が上がった大軍のイルム軍の戦い。

総司令部が、いやユーラス国が難攻不落とまではいかないものの、容易には突破されないと信じていた北門外壁要塞陣地は、僅か二時間と十五分の戦闘で陥落した。

「このままでは拙い戦になるな」

ランザード大將は北門司令部の作戦室にて呟いた。

北門外壁陣地を突破した敵軍は勢いに乗って一気に南下してきた。味方の防御線は次々に突破され、現在はこの北門司令部から僅かしか離れていない防衛線で何とか持ち堪えているが、ここも突破されるのも時間の問題であった。

（敵の大將は大したリアリストだな）

ランザードはそう思うようになっていた。

敵の指揮官は、五個軍団という大軍を駆使した作戦を堂々と、しかも単調ともいえる形で実行して防御線を次々と突破している。

勿論、ユーラス軍もそんな単純な作戦を全て見抜いていたが、その

全てを防ぐ事が出来ず、突破を許している。

何故か？ 簡単だ。兵力差が圧倒的にありすぎるからだ。

こちらが軍用銃を一発撃てば、相手は五十発撃ち返してくる。こちらが野砲を一発放てば、相手は三十発も撃ち返してくるのだ。

既に各地に援軍を要請したが、西門と東門は敵と交戦中、南門などは正反対に位置しているため援軍が来るまでかなりの時間が掛かってしまう。

もともと、東門と南門の守備隊は援軍に来て也大した戦力にはならないだろうが。

頼りはカルニア街道に配置されている第四軍であるが、敵の進撃速度は尋常ではない。既に敵は都市内部深くまで侵攻しているのだ。

これにはランザードも舌を巻いた。流石は電光石火の速攻が伝統であるイルム軍だ。進軍速度が他軍の二倍はあろう。

この速度で来られると、援軍が来るまでにこの都市が無事であるかは定かではない。

ランザードは軽く室内を見た。幕僚達が血相を変えながら前線から送られてくる悲惨な情報に耳を傾け、状況を地図に書き込んでいく。

しかし敵は大軍、更に敵兵の士気は高く、勢いは凄まじい。これを食い止めることは至難の技であった。

第三軍は援軍を送れる状態ではなく、第四軍の援軍が遠い現状において、唯一の希望は空軍だが、戦空隊は今も敵主力と砲撃戦を展開していた。

双方とも主力のメテウス級戦空艇の撃沈などの多大な損害を出しながらも奮闘し、戦況は五分五分であった。

ランザードはこの状況でも、いや、こんな状況だからこそ落ち着こうとした。

ランザードは如何なる時も常に冷静沈着であると、彼を知る者は評

価するし、何よりランザード自身がそれを自負していた。

「閣下、前線より伝令が来しました」

幕僚の一人が、それまで考え込んでいたランザードに報せる。ランザードは無言で頷く。

「失礼します」

少ししてその伝令と思われる兵士が敬礼をして作戦室に入ってきた。その姿はいかにも戦場から駆け付けて来たといわんばかりの格好であった。

ユーラス軍が正式に採用している、ユーラス国旗と同じ紺碧色で染められた鎧は、あちこちが泥まみれであり、そして何より、その伝令の左肩と額にある真ん中あたりから紅色に染まっている包帯が前線の熾烈さを物語っていた。

負傷兵を伝令代わりに使うとは、いやはや……。

「第三大隊指揮官、ウィンス大佐より伝令であります。

第三防衛地区で敵の大軍を迎撃しつつも、我が方の被害甚大。弾薬も残り僅か。至急、援軍及び補給を請う。

又、第一大隊指揮官マクシア大佐、第五大隊指揮官補佐ハミル中佐、他各大隊の数名の幕僚が戦死。以上であります」

「そうか、下がって良い」

「は、失礼致します」

伝令は右腕で敬礼すると、作戦室から出ていった。

作戦室にいる幕僚達の顔色は真っ青であった。この作戦室にいる誰もが悟ったのである。

このままではトラディツオの守備の要である北門守備隊そのものが崩壊してしまう。そうなればこのトラディツオは陥落したのも同然であった。

もしも北門守備隊が壊滅となると、敵はそのまま矛先を西門に向けて進撃するだろう。

何れにしても味方は各個撃破され、トラディツオにいる軍隊は全滅してしまう可能性が大であった。

「敵の狙いは……」

ランザードは重い空気が支配してしまった作戦室を何とか変えようとした。

敵はイルム軍だけではない。敵は味方、そして己の中にも存在するのだ。

例えばこの作戦室に漂っている重苦しい空気、これをまずは撃破しようではないか。

「敵の狙いは電撃戦による各部隊の各個撃破だろう。現に北門は大軍によって大打撃を受け、敵は予想を遥かに上回る速さで進撃してくる」

「はい。敵は北門に戦力を集中して攻めて来ました。我が方と敵の兵力差も六倍もあります」

「そうか……」

彼は参謀長の言葉を聞いて、しばらく無言になった。

やれやれ、十年前と相も変わらず、トラディツオは守りにくいものだな……。

（何か起死回生の妙手は無いだろうか？）

ランザードはじつと地図を眺めた。

地図の北側には敵を表わす赤いピンが留めてあり、そのすぐ傍には味方を表わす青いピン、そして司令部を表わす緑色のピンが留めてあった。

彼はふと北門司令部のその南を見た。

そこで、ランザードは見付けた。彼の探し求めていたものを。

「参謀長！ この司令部の南には何かがある？」

「は……？ トラディツオ総督府でありますか？」

「いや、その北だ。この北門司令部と総督府の間に、だ」

ランザードは地図の中央にある緑色のピンと北にあるピンの真ん中やや北寄りのところを指差した。

幕僚達は食い入るようにその指先を見る。

「ユラン川ですか？」

参謀長の疑問の声は、この場にいる者の代表であった。

「そうだ。ここで敵を分断、各個撃破できると思わないか」

「……！」

彼らは理解した。我らが大将が何を考えているのか。

ランザードの指差した場所は、トラディツオの中央北寄りを東から西へ流れる川、ユラン川であった。

この川は水深も深く、対岸まで100メートルを超える。

「しかし、この辺りのユラン川には鉄橋が架かっております。それも一つではなく、七つもあります。

この七つに爆薬をセット出来る時間があるとは思えませんが……」

幕僚の一人が答える。

その通り、その辺りのユラン川の対岸と対岸を繋ぐ鉄橋は、全部で七つもあった。

そして、その全てに爆薬を仕掛ける時間は最早残されていない。

「何も爆破して落とさなくても、方法はあるだろう」

「爆破せずに、ですか？」

参謀長ら幕僚達は怪訝な表情を見せる。ランザードの表情は相変わらず険しい。彼はゆっくりと、口を開ける。

「何故、北門外陣地は崩壊したのだ？」

「……！！」

その一言で、参謀長は全てを悟った。この大将が何を狙っているのか、何故そんなに険しい表情なのかも……。

思わず参謀長は声を上げた。

「わかりました！ 閣下の狙いが！ しかし危険です。下手をすればその部隊は全滅です」

「わかっておる。しかし、やらねばやるまい。兵士達の技量と、天佑を信じるのだ……」

「……了解、すぐに手配します！」

「頼む」

参謀長はランザードの作戦が未だ分かっていない参謀達に早口で説明し、急いで指示を出し始めた。

ランザードは椅子に座ったまま、瞑想をしていた。

彼の心に在るのは、この危機的状况を作り上げてしまった事。

そしてそれを打開する為とはいえ、この馬鹿げた作戦しか思いつかなかった自分への憤りと、

この戦場で死んでいった、そして死んでいくであろう者達への、謝罪の念だけであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7344h/>

Wahrheit

2010年10月9日13時45分発行